第58集

研究紀要

あいさつ　　三好教育会　会長　豊田　能久

――――研究指定校研究――――

■変化する社会の中で,心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成
～身近な自然や人とのかかわりをとおして
しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫～
西井川幼稚園　教諭　元木真砂代

■豊かな心をもち,未来に向かって主体的に行動する子どもの育成
～一人一人のちがいを認め,助け合う仲間づくりを通して～
王地小学校　教諭　濱口　ミユ

――――教育研究所研究員研究――――

■社会科デジタル教材の開発と活用
～ICTの有効な活用をめざして～
三好教育研究所　研究員　常村　淳

■生徒の意欲関心を高め,豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～
三好教育研究所　研究員　宮成万寿美

三好教育研究所
平成29年度

ご あ い さ つ

吹く風にだんだんと春の暖かさを感じるようになりました。年度末を迎えて，会員の先生方にはお忙しい日々をお過ごしのことと思います。日頃は三好教育会の振興のために，温かいご理解とご支援をいただいておりますことに心からお礼を申しあげます。

本教育会と三好教育研究所では，平成２９年度（本年度）より，新たに研究主題を「変化する社会の中で，心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成」として，今後５年間研究を続けていきます。これからの社会は，人工知能の進化と情報化やグローバル化により，予測が困難な時代になるといわれています。三好地域においてもその変化の波は多少なりともやってくることが予測されます。子どもたちには，社会の変化に対応しながらたくましく生き抜いていく力が必要となります。しかし，これまでと同様にふるさとの自然や人々とのふれあいを大切にしながら豊かな心を育んでいくことも忘れてはいけません。その上で，グローバル的に広い視野を持った子どもたちの育成をめざして，これから研究を続けていくことになります。

本年度は，平成２９年８月１７日の「三好教育研究発表会」において，西井川幼稚園と王地小学校に，これまで取り組まれてきた研究の成果をご発表いただきました。

○身近な自然や人とのかかわりをとおして，しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫

西井川幼稚園　教諭　元木真砂代

○豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成

～１人１人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを通して～

王地小学校　教諭　濱口　ミエ

詳しい内容等については，このＣＤの中に入っていますのでご覧ください。すばらしい発表をいただいた西井川幼稚園と王地小学校の先生方のご労苦に対しまして，心から敬意と感謝を申しあげます。

また，発表のあとには名古屋学芸大学特任教授の松崎利美氏に「ユニバーサルデザインの視点で学校を変える」～教師の意識が変われば，子どもが変わる～と題してご講演をいただきました。特に，障がいのある人にとって優しい環境は，健常者にとっても優しいという理念に共感しました。その視点で，学校を見直すことが大切であり，必要であることをこれまでの経験や体験を交えながら，たくさんの実践例をお話してくださいました。とてもわかりやすく有意義な講演でした。

この研究紀要は，各学校に１部ずつＣＤ化して配布させていただくとともに三好教育研究所のホームページにも掲載をしています。ご活用いただければ幸いです。

終わりになりましたが，本研究紀要の発行にあたりまして，いろいろとご指導やご助言をいただきました先生方，研究協力校（園）及び関係各位に心よりお礼を申しあげますとともに，会員の先生方のますますのご活躍をお祈りいたします。

平成３０年３月　　三好教育会長　　豊田　能久

目　　次

あいさつ　　三好教育会　会長　　豊田　能久

―――――研究指定校研究―――――

■変化する社会の中で，心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成････････････････････････1
～身近な自然や人とのかかわりをとおして
しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫～
西井川幼稚園　教諭　元木　真砂代

■豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成･･････････････････････13
～一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを通して～
王地小学校　教諭　濱口　ミエ

―――――教育研究所研究員研究―――――

■社会科デジタル教材の開発と活用･･24
～ＩＣＴの有効な活用をめざして～
三好教育研究所　研究員　常村　　淳

■生徒の意欲関心を高め，豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて････････････37
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～
三好教育研究所　研究員　宮成万寿美

■既刊『研究紀要』の内容一覧（平成元年～）･････････････････････････････････････51

研究主題

変化する社会の中で，心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成
～身近な自然や人とのかかわりをとおして　しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫～

西井川幼稚園　教諭　元木　真砂代

1 はじめに

幼児は，さまざまな経験を積み重ねることで，心が豊かになっていくと考える。それは，豊かな感動体験を心に仕舞う，「たくさんの引き出しをもつこと」に例えられる。

そのためには，健康な心と体が必要である。しかし，最近のライフスタイルの多様化などにより，大人型の生活リズムになったり，大人に依存的になったりしてしまう幼児が多くなっている傾向がある。自然や人とのかかわりを考えたときに，まずは『自分のことは自分でする』そういった気持ちや態度を育てていくことが大切である。そして，自分でできたという喜びが，幼児の自信となり，意欲的に活動するきっかけにもなるのではないだろうか。

その土台として，遊び込めるしっかりとした体づくりにも努め，自律的な態度を身につけながら，さまざまな経験を通して，豊かな感性とたくましく生きる力を兼ね備えた豊かな人間性をもつ幼児に育ってほしいと願い，日々の保育に取り組んできた。

本年度はさらに，自分一人の力ではどうにもならない自然を題材に，自分で課題を見つけ，自ら学び，自ら考え行動できる能力が育まれるよう，本研究主題を設定した。

2 研究の視点と方法

前年度は，幼児は，自己発揮することで自分づくりができ，だんだんと自尊感情が芽生えたり，周りの存在に気づいたりしながら成長していくと考えた。その成長過程において，『自分が好き』と思えるような日々の保育に取り組む中で，その心と対話する保育を心がけ，幼児と教師がともに創り出す保育とはどういったものかを実践を通して探っていった。

本年度は，変化していく社会の中で，将来たくましく生き抜いていく力を身につけるために，どういった主体的な学びが必要なのかを実践を通して研究をすすめていく。

3 経過報告

本園は，自然環境に恵まれており，地域との結びつきが強く，地域の方々の読み聞かせや２０年以上も続く三世代交流学習会などの行事がある。そのような環境の中，幼児が主体的に挑戦したり考えたりすることで自分に自信をもち『自分が好き』と思えることが大切であると考えた。そこで，**基本的生活習慣を身につけ，豊かな感性とたくましく生きる力をもった幼児の育成**をテーマに，しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫として「幼児の土台づくり」「フェアプレイでグリーンカードの木を育てる」「心と対話する保育」を心がけてきた。

本年度は，**「身近な自然や人とのかかわりを通して，たくましく生きる力を育む」**をテーマに普段の生活の中で気にとめることもなかった風や太陽の陽ざし，影などを感じながら生活することで，自然のありがたさや不思議さに気づき，自然の心地よさを感じとってほしいという思いから「園庭も保育室」「アウトドアな生活をしよう」と，日々保育に取り組んでいる。

４ クラスの実態

＊２年保育１年目（４歳児）

○　男児４名，女児４名の計８名である。素直で子どもらしく，自ら教師や友達とかかわろうとする幼児が多い。

○　集団生活を経験している幼児が多く，入園当初は好きな遊びを見つけるが，教師が声をかけるまで遊ぼうとしなかったり，一人では遊ばなかったりする姿が多く見られた。また，身の回りのことを自分でしようとしなかったり気づかなかったりと，基本的な生活習慣が身についていない面も見られた。しかし，１学期の終わりごろには目的をもって登園し，自分なりに遊びを楽しんだり，遊びを深めるために，友達を誘ったりする姿が見られるようになってきた。

○　園庭では，友達と一緒に草花で色水遊びをしたり，砂でご馳走を作ったりして自然に触れて遊ぶことを好み，さまざまなものに興味や関心をもって取り組む姿が見られる。

○　生き物や野菜などに「おはよう」と自ら声をかけ大切に育てている。また，体を使ったリズム遊びやボール遊び等を好んで遊ぶなど，感受性が豊かで活発な幼児が多い。

＊２年保育２年目（５歳児）

○　男児４名，女児８名の計１２名となる。新しく４名の女児が入園したことで，入園当初は，好奇心が旺盛で，思い立ったらすぐ行動するにぎやかな印象のクラスとなった。

○　園庭で，バッタやダンゴムシなどを追いかけたりたわむれたりして遊ぶ幼児や，草花の色水遊びを新しい友達や４歳児に教える幼児など，日ごとに興味のある遊びを見つけ，熱心に取り組む姿が見られるようになってきた。

○　４月後半には，友達と協力して段ボールでハウスを作っていくうちに，慎重に進める幼児ととにかく試してみようとする幼児とがうまく調和しはじめた。

○　１学期の後半には，「どうする？」と相談し合いながら遊びを進める姿が見られ，自己主張もするが友達の意見も受け入れられる仲間関係が築かれ始めてきた。

５ 実践事例

＜園の取り組み＞　～フェアプレイでグリーンカードの木を育てよう～

本園では，フェアプレイでグリーンカードの木を育てている。初めは，給食が完食できたことだったり，転んで痛かったけど笑顔になれたことだったりと，一人一人の頑張りや優しさなどを，グリーンカードに見立てた葉っぱに書き，木につるしていたが，１学期も終わりごろにもなると，「お友達が順番を代わってくれたの。とっても優しいよ。グリーンカードに先生書いてあげて。」と友達の良いとこ見つけができ，そのことを伝えようという気持ちが育ってきている。

＜事例１＞　～カニを捕ってくれたおじさんに絵手紙を描こう～

サワガニを捕りに出かけると，田植えの準備をしていたおじさんが，カニを４匹見つけて子どもたちに渡してくれる。カニを持ち帰った次の日，カニの周りにみんな集まり甲羅を指で触ってみたり，水をかけてみたりして楽しんでいた。

子どもたちが楽しそうにカニと過ごしている姿に，保育者は「おじさんに，ありがとうの気持ちを伝えたいよね。」とつぶやく。K 男「うん。ほんまじゃな。」H 男「ほな，ありがとうってお手紙かこうや。」まわりの子どもたちも「そうしよう。」「かこう。」という。保育者が「どんなお手紙にするの？」と尋ねると，Y 子が「カニの絵にしたら。」という。絵の具を使って描くことを提案すると，「赤とオレンジの色がええわ。先生ある？」と H 男。そして，みんなで手際よく描く準備を始めた。じっくりカニを観察して，いっきに胴体を仕上げる。足の数を数えたり，ハサミの形をよく見たりする。カニの周りには，おじさんが好きかもしれないと言って，果物やハートなども描き，一人一人が感謝の気持ちを表現する。

数日後，おじさんに絵手紙を手渡して帰る道中「おじさん，喜んでくれたなぁ。」「うん，喜んでくれたなぁ。」と何度も話す顔には，やり遂げた後の達成感があふれていた。

＜省察＞

○　手や指で，絵の具を使って直接画用紙に描くことで，自分の想いが表現しやすいと思い，絵の具は使うが絵筆は用意しなかった。子どもたちは，手のひらや指を上手く使って，ダイナミックにカニを描きあげた。

○　仕上がった絵は，魅力あふれるものとなり，深い想いがあれば，こんなにも伝わる描写になるのかと驚いた。そして，「お礼を言いたい」「ありがとうと伝えたい」という想いからカニの周りにおじさんが好きかもしれない物を描こうとする気持ちがすばらしいと思った。心が揺さぶられる体験とは，こんなにも感性を豊かにさせてくれるものなのかと感動した。今後は，土や風，肌や匂いなど自然物に触れ直接体験という五感を通した体験をもっと意識して取り入れ，多くの発見や感動を積み重ねていきたい。

ステキな，えてがみをわたすことができてよかったね。
みんなのえがおもステキだよ。
グリーンカードのはっぱ

＜事例２＞　～降園活動の中で「カニさんになぁれ」～

降園活動では，リズム遊びや歌をみんなで歌うことなども，計画的に取り入れている。その日も，風船ガムが膨らんでパーンと裂けると，魔法がかかり言われた物になってしまう『風船ガムのお話』をやろうと私を誘う。

「トントントントン，モグモグモグモグ，ピープーパーン・・・・。猫になあれ。」の囃子言葉に「ニャーオ。」「ギャーッ。」など部屋中，子猫や威嚇をしている猫の真似をして，一人一人が楽しんでいる。

しばらく，ゾウやチョウに変身したのち「・・・・カニになぁれ。」と子どもたちが大好きなカニを保育者が言うと，腕を曲げ，指先をハサミにしてしゃがみ「行こう！」と友達を誘い合って横に動き出すK子やA子。「石の上でみんなを見てるよ。」とO男。保育者の顔を見てニコッと微笑みながら友達の後を追うR男やH男。そんな中，しゃがみ込みじっとしているK男に保育者が「あらぁ。」と声をかけると「ごはん，食べてます。」と腕を曲げ指先をハサミにしてご飯を口元へ持っていく仕草をする。「カニさんてそんなふうに食べるよね。そっくりだよ。上手だね。」と保育者が共感すると，一口二口食べる真似をして，「おーい，みんなまってぇ。」と友達を横歩きで追いかける。体が少し疲れてきたようなので，「ガームのお話。」と遊びの終わりを告げる。「あー楽しかった。」と子どもたちの声が聞こえる。R子とE子は「先生，明日もしよう。」と保育者のそばに来て話し，足を投げ出し，体を休める。

＜省察＞

○　降園活動時には，遊びを通して体づくりを行っている。友達と一緒に歩いたりスキップをしたりと曲に合わせて表現することを恥ずかしがっていたH男も，友達の様子を見ることで，参加していた。表現を必要としないボール遊びなど楽しく遊ぶ友達の様子を繰り返し見て動き方が分かったのか，５月中旬には友達と一緒に体を動かし楽しめるようになっていった。『風船ガムのお話』では，私と目が合うと恥ずかしそうにするものの，友達と一緒に自分の表現で楽しめるようになってきた。

○　特にカニの表現は，子どもたちが最も得意とする表現で，自分たちが見た様子を一人一人が自分の解釈で表現して楽しめており，カニを大切に想いカニとの絆までもがうかがえるような姿がみられる。

○　また，カニのようにしゃがんで足を横に開ける動作は，関節を柔軟にさせる運動となる。体を思うように動かすためには，関節の柔軟さは必要となってくる。このような様々な動きを楽しみながら取り入れていくことで，ボール遊びなど，体を大きく使って遊んだり，ひとつの遊びを持続して楽しんだりする姿が見られるようになってきた。

○　そして，言葉を楽しむ繰り返しの多い絵本を声に出して読んだり，歌うことが楽しいと感じて歌ったりすることで，遊ぶ声，笑う声も力強く大きくなってきた。

○　このような子どもたちの成長を目の当たりにすると，降園活動の大切さを実感する。子どもたちが，さまざまな経験を体験するためには，健康な身体であることが大切で，その土台づくりとして，今後も計画的に発達に沿った楽しい降園活動を実践していきたい。

カニさんのうごきがとってもじょうずだね。

グリーンカードのはっぱ

＜体づくり年間計画＞

遊びを通した幼児の土台づくり

時　期	主な運動の内容	獲得する機能や姿
４月～５月	***リズムに合わせて・・・*** 歩く　　歩いたり止まったりする スロー・ハイ・ジャンプ	心と体の解放 リズム感 自己調整力
６月～７月	***ボール遊びや変身遊び*** ボールを相手に向かって手渡す・転がす バウンドさせる・投げる	自己調整力 腹筋，手首や肩まわりのなどの力を高める
８月～１０月	***体全体を使って*** ゆりかごゆらゆら（足首をもって反る） 腕を振って足を上げて ワンツーいす取りゲーム（行進）	柔軟性，身体認識力の育成 腹筋 のばし機能 状況判断や俊敏性
１１月～１２月	***体をＶの字にする*** 手を床につけ，体を支えて 両足を上げＶ字姿勢を保つ 手も水平に伸ばしてＶ字姿勢を保つ	平衡性 腹筋力 身体認識力の育成 曲げる機能
１月～２月	***動物になって競争*** 四つ這いで，ゆっくり這ったり すばやく這ったりする 手押し車（背中にタオルをねじってのせる）	筋力・巧ち性・協応力 リズム感　身体認識力の育成 模倣能力　空間認知能力 ささえ機能
３月	***片足変身ポーズ*** やじろべ・飛行機・ロケット	バランス　平衡性　筋力 身体認識力　ひねる機能
遊びを 上達させる遊び	***ワッ！ニに注意*** 四つ這いでリングを通って進む	四肢の筋力アップ バランス　企画能力の育成
体を チェックしよう	***視る*** ***軸*** ***手・指***	しっかり視ているか 体が安定しているか 左右うまく使えているか

「遊びを通した幼児の土台づくり」
監修
徳島県トレーナー協会
キッズコーディネーショントレーナーＮＳＣＡ　ＣＳＣＳ
理学療法士　加藤　達也
ＮＰＯ法人　あかねの和
児童発達支援放課後等ディサービス　とおりゃんせ２
理学療法士・保育士　加藤

＜事例３＞　～カニさん，ありがとう～

１学期の終業式を明日にひかえ，K 男が「カニさんもそろそろお掃除してあげようかな。」と言う。その言葉でみんなが水槽の周りに集まりだした時，私が声をかけた。

「みんな，ここに来てまあるくなって。」と保育室に誘う。子どもたちは何の話があるのかと集まってきた。保育者が「あのね，明日は終業式でその次の日からは，初めての夏休みになります。夏休みになると，みんなはお家で過ごしたり児童クラブで過ごしたりして，幼稚園には来ないんよ。」O 男が「ええ！？幼稚園に来んの？」「ええー。じゃあ，みんなどうするの？」と Y 子。「プールには来るけどこうやってみんなで遊んだり，話をしたりすることは出来ないんよ。」の保育者の言葉に，子どもたちは「へぇ。」と不思議そうな様子だ。「それで，カニさんのお世話はどうしたらいいかな。みんなの気持ちを聞かせて。」と保育者が言うと「・・・」返事が返ってこない。少しして，A 子が「帰すぅ？」H 男が「うん。そうじゃ。もとの所へ帰したらええわ。」O 男「うん。お父さんとお母さんの所へ帰らしてあげよう。」「いいの？プールに来る時お世話もできるよ。」と違う方法もある事を知らせるが，K 男が「お家に帰してあげよう。」と言う。H 男「ほな，綺麗にしてあげてから帰してあげよう。」の言葉に８人が一斉に立ち上がり，カニの水槽を手慣れたように持ち上げ掃除を始める。

＜省察＞

○　草花など，自然物で遊んだ後は土に帰してあげる習慣もあり，自分たちも幼稚園には，しばらく来ない事を知って，カニの本当のすみ家に戻すことが良いと判断したのではないかと考える。そして，家庭の温かさを知っている子どもたちなので，もとの所だと家族がいるんじゃないか。待っているかもしれない，という想いが膨らんだのだろう。

○　その日は暑く，歩いている時も「カニさん暑いけど頑張れ。」とバケツに入っているカニに声をかける姿もあった。「こんなにも暑いのに，先生バケツにお水入れてあげたらよかったな。」とカニを気遣う姿もあった。

○　ちょうど，カニを捕ってくれたおじさんと会い，記念写真を撮る。おじさんは，あの時のカニが生きていた事に驚き，ここまで育てた事に感心してくれた。おじさんに「すごいで。きれいに飼うたな。」と褒められた時の表情は，自信に満ちあふれていた。

○　１学期の大半を一緒に過ごしたカニを，純粋に心配する姿に感動するとともに，生活の中からともに生きるための工夫や知恵を学びとっていることに感心した。

○　また，カニを育てる中，自分たちの勝手な気持ちからカニがストレスを感じ，仲間を傷つけるなどさまざまなエピソードがあった。しかし，いろいろなことを経験し乗り越えて，命の大切さや小さな生き物も自分たちと同じで，住みやすい環境が必要なことを知った。最後まで，投げ出さず責任をもって自分たちで飼育した事に，大きな成長を感じた。

カニさんは，ごはんがいちばんすきだったね。
たいせつにそだてられたことは，カニさんもわすれないとおもうよ。

グリーンカードのはっぱ

＜事例４＞　～ダンボールの不思議～

「そらまめくんのベッド」を読んで，自分たちも庭で暮らそうとダンボールで「そらまめくんのハウス」を作る。草花でご馳走を作り，ハウスでパーティーを開いたりトレーニングマシンを描きトレーニングをしたりして，ハウスを中心に遊びが繰り広げられていた。

そんな時，休み中に降った雨で，崩れかけたハウスを見て，一旦片付けることを子どもたちで決める。

いつものようにダンボールを破ってゴミ袋に入れようとするＯ男。「あれっ。水に濡れたら柔らかい。」の言葉に保育者はＯ男を見る。保育者と目を合わせたＯ男は「ダンボールは紙じゃけん弱いってパパが言よった。ほんまじゃ。これなら片付けに便利じゃな。」「発見だね。」と保育者が言うと，Ｏ男は別の場所に移動し「これは，濡れてないけん硬いわ。」と周りの友達にも聞こえるような大きな声で話す。その様子を初めから見ていたＨ男が「水に濡らそうや。」と誘うようにＯ男に言う。Ｏ男は「ジョウロに水，入れてくるわ。」と足洗い場へ急ぐ。

＜省察＞

○　戸外での活動をメインにしていたので「そらめくんのベッド」(なかや　みや作　福音館書店）を降園活動の中で私が読み終わった後，もう一度ゆっくり絵本を読み返してみた。

１０ページ目で，カットが園庭に似ていることを私がつぶやくと，共感してくれる子どもたち。そして自分たちも専用のベッドを明日は作るぞと盛り上がった。

○　思うようにベッドは作れなかったが，大きな段ボールを見つけると，ハウス作りに変更となり熱中していった。

○　事前に，家作り用にとダンボールやテープ類は準備しておいた。スムーズに取り組めたので，子どもたちの「やる気」が持続したのだと思われる。

○　幼児の主体的な活動は，家庭で親子の会話を生み，活動がより意欲的になったり，話の内容を試したりすることで，家族や両親を頼もしいと尊敬することにもつながることに気付いた。

○　また，園生活全てに軽快さがあり，『自分のことは自分でする』から『できる』へと自信にもつながった活動であったと感じている。

そらまめくんのハウス，たのしかったね。ダンボールがみずによわいってしらなかったね。

これからのおそうじが，たのしみだ。

グリーンカードのはっぱ

「イカダづくりへのプロローグ」

～プールで遊ぶ～

晴天が続き，園庭では砂場に水を入れたりジョウロで水をまきドッジボール用の円を描いたりして，遊びに水がかかせないようになっていた。そんな中，タライに水をはり，木片やトレーを浮かばせて遊ぶ，男児３人程のグループがいた。ホットボンドで木片を貼り合わせ，船を作っては浮かばせ船体を大きくさせて遊んでいた。

タライが手狭になってきたので，プールに１０ｃｍ程水をはり，遊べるようにすると，興味が湧いてきたのか，女児たちがペットボトルを手に集まって来た。それぞれが木片やペットボトルを組み合わせ工夫しながら「浮かんだ。」「波が来てひっくり返った。」などと幾日も楽しむ。

「お水をこのぐらい入れたら沈むけど，浮くんよ。」とペットボトルで遊んでいる K 子。「葉っぱのお客さん，落ちんよ。」と木片にヤクルトを付けイカダボートを発案した R 男。「わぁ，すごいな。こんなに小さいのにお客さんが乗れるんじゃ。」と N 子が感心する。「どれが凄いか競争してみる？」の保育者の提案に，自慢の船を持って集まる子どもたち。「どれが向こうまでたどり着くか，ヨーイ・スタート。」の掛け声に一斉に浮かばせた船を手で扇いだり，歩いて波をたたせたりして進ませる。「こっちじゃない。」「進んだ，進んだ。」「ああ，壊れた。」とみんなの気持ちが高まる中，「ゴール！R 男くんのが１番だったよ。」と保育者が判定する。「R 男くんすごいな。」と周りから絶賛の声があがる。

＜省察＞

○　思い思いに木片やペットボトルなど貼り合わせる手段として，ホットボンドを使用していたが，何度も水につけると剥がれやすいことに気付く。

また，上に積み上げてもバランスが悪く，ひっくり返ることも経験をする。

○　女児の多くは，ペットボトルに色をつけると水面に色が映りキラキラ輝くことから，どんな色や模様が映ったり映えたりするのかを，探究していた。しかし，競争することで，ペットボトルだけでは思う方向には進まないことに気づき，イカダへの興味が高まってきた。

○　広々としたプールで遊んだことにより，様々な発見や体験ができたと思っている。一人一人が満足するまで遊び込むことで，「浮く」「沈む」「光る」「進む」「ひっくり返る」など様々な体験ができ，水に親しむ，風に親しむなどの自然とかかわることもできたと思っている。このように，時間と場所の確保は大切であると実感した。

じぶんでけんきゅうをしてふねをつくるなんて，すばらしいね。
いろんなはっけんがあって，たのしいね。
グリーンカードのはっぱ

～共同でイカダづくり～

大人用の座布団ほどの板を素材置き場に準備しておく。「あれっ，いいものがある。」とO男が見つける。「これで，イカダをつくろう。」と友達を誘うと，E子とY子が「私たちのペットボトル，使ってみない？」と話をもち掛ける。「何でくっつけるの？」とY子。O男は「ホットボンドは取れるしな。なんかないかな。」と辺りを見回す。「ヒモは？」とY子。「そうしよう。」と意見がまとまり板にペットボトルを紐で固定し始めた。

「浮くかな。」「せーの。」と水面にイカダを放す。「わぁ，浮いた。」「ボールも乗せてみようよ。」とY子が言い，プールサイドに置いてあったボールを1個乗せてみる。・・・ボールを2個3個と増やしてみる。4個目になるとバランスが悪くプールに落ちてしまう。「今度はこれを乗せてみよう。」とK子が水の入ったペットボトルを持ってきて乗せてみる。「わぁ，乗った。」と驚いた様子。それを見て「ねぇ，誰か乗れるんじゃない？」とE子。「R男くんがええわ。一番小っちゃいけん。」「そうしよう。」とR男を誘いに行く。

4人でイカダを持っているうちに，R男が乗ってみる。「せーのっ。」とそっと手を離すと「わぁ，浮いとる。」と驚く。このことをきっかけに，「次は私。」「次は僕。」と全員がイカダにのってみる。そして「ねぇ，みんなで乗れるイカダ，作ってみない？」とY子の言葉にみんな，賛同する。

＜省察＞

○　少しずつボールを増やしたり，重みのある物で試してみたりと，自分で考え楽しもうとする姿は，今までの経験が活かされているからだと感じた。

また，最後にR男なら乗れるかもしれないと「小さい」つまり「自分より軽い」ということに着目したことにも感心した。

○　そして，人が乗っても浮くことを体験したことで，イカダへの興味が「作って楽しむ」から「乗って楽しむ」へ移行したと思われる。

○　みんなで乗ってみようという目標とみんなが乗れるイカダを作る楽しみが新しいクラスとしてのスタートになったと感じている。

すてきなイカダができたね。おともだちとはなしあって，つくるってすごいよ。これからたのしみだね。

グリーンカードのはっぱ

～どんなイカダにするのかをクラスで話し合う～

「どんなイカダにするの？」と保育者がきく。「R 男くんみたいな下にペットボトルをして上に板をのせよう。」と O 男。「みんなが乗るんだったら大きなのがいるわ。」と H 男。「そんな，大きな板あるかな。」と保育者が言うと「ダンボールは大きいけど，水に弱いけんな・・・。」と O 男。困った様子の子どもたちに「Y 男くんのお家には木が沢山あるんだけど。お願いをして分けてもらう？」と保育者がなげ掛けてみると全員一致でお願いしてみることになる。「ペットボトルはお家にあるけん持ってくる。」と N 子の言葉に，口々に自分でペットボトルは用意することを言う。

＜省察＞

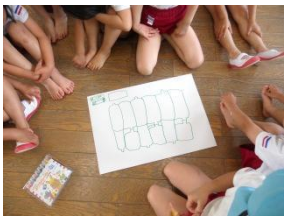
○　ハウス作りの経験から，ダンボールは使えないとの判断に結びつくことができた。また，時間をかけたっぷりと遊び込むことで，イカダの構造についてもイメージし易かったのだと思われる。

○　その後，家庭でイカダ作りを話し，ペットボトルの収集を手伝ってもらったようだ。自分たちで考え行動する姿は頼もしく，イカダ作りへの期待が大きいことがうかがえる。

○　イカダにみんなで乗れるよう，跳び箱をつかって何人乗れるか挑戦してみる。足の置き方や手の位置，体の合わせ方など，より多くの友達と乗れるように話し合って工夫する。

これは，判断力や友達と協調する力が身に付き，自分の体の認識を高めるとともに手足の位置関係や友達との距離間を習得する身体活動でもある。この触れ合ったり，支え合ったりすることで，友達との関係も深まり，自分の力加減を自然に調整できるようになってきた。

じぶんたちのイカダはじぶんたちでつくる。
とってもカッコイイよ。
グリーンカードのはっぱ



「川でイカダを浮かばせよう」プロジェクトの概要

水に親しむ中で，水に浮く物・沈む物など試したり発見したりして，イカダボートに辿りつく。１人用のイカダをつくりプールに浮かばせてみると安定性もあり人が乗れることを体験する。

５歳児のクラス全員で相談をして，もっと沢山の友達が乗れるイカダを作って浮かばせることとなり，ペットボトルの収集や木材の調達を行った。

頂いた木材は角材だった。長さがあったので，ノコギリで短くする。大きなイカダを組み立てたが，重たすぎてうまくペットボトルを装着できないことに気づく。そこで思い切って分解をし，角材を３つのグループに分け製作することとした。

紐や釘を使って形をつくり，グループごとに思い思いの絵を描いた。プールに浸水させてみるが，浮かぶチームと沈むチーム，浮かんでも沈みかけるチームとそれぞれだった。

その後，ペットボトルを足したりイカダを補強したりと知恵と力を合わせて仲間とともに完

成させた。

友達と息を合わせてタイミング良くしないと，イカダに乗れないことも次第とわかり，様々な経験がこのプロジェクトで実となるものになっていった。

子どもたちの熱心な取り組みを支援している過程で,「このイカダで実際の川を下らせてあげたい」という教師の願いは日々に強くなっていった。自作のイカダで身近な大自然である三好の渓谷を下るという，自然に抱かれチャレンジする体験をすることで，子どもたちにとって大きな自信となることが期待された。そこで，今後の成長過程においてたくましい力となることを願って，PTA 役員会で園側からプロジェクトの提案をする。子どもたちのために・・・。と承諾していただき,「川崎水辺の楽校」に於いて実施する。

プロジェクトを通して保護者の感想から　　～幼児教育への想い～

○　みんなで１つの物を作って遊ぶという経験は，家ではもちろんしないし，幼少期の自分自身も記憶がない。今回，プールではなく広い自然の中でイカダを浮かばせて遊べるとは，子どもたちがうらやましかった。

○　家では「今日，プールでイカダを浮かばせたんよ。ほんで，沈んだんよ。」「今日は壊れたんよ。」「今日は，浮いたんよ。」と話してくれるので，楽しいんだろうな，と思った。また，話を聞いていたので，当日見事なイカダにも感動したし，そのうえ浮かんだことにさらに感動した。毎晩，親子で話をして楽しい時間を過ごせてよかった。

○　いろいろな経験をさせてくれるのでありがたい。自分のことができるようになっていった時，「ああ，家でさせてなかったな。」と気づいた。子どもを待つことって必要なんだと，何かが出来るようになる度，そう思って反省をする。

○　少々曇っていてもプールに入るとか，外遊びで肌が焼けていることで，外に連れ出してくれているんだと，ありがたく思っている。また，わらべ歌など昔の遊びも教えてくれていて，家で一緒に遊べることがうれしい。これからも，いろいろな遊びや経験をどんどんさせてほしいし，協力はいつでもします。

○　子どもが，あんなに一生懸命なのに，親が協力するのは当たり前。今回のイカダは最高。西

井川幼稚園の伝統行事として来年もするべきだ。子どもの，あんな笑顔が見られるんだから。

○　近頃の子どもは，自然で遊ぶ機会がなくなっています。親世代の私たちが幼少のころ，川は危ないと怒られてきたことにより，遊ぶ方法がわからないという事情があります。

遊ぶ方法を習うべきは，実践すべきはむしろ親であり，今回楽しそうに遊ぶ子を見て，自分たちへの気づきもありました。自然は危ないということもありますが，逆にいえば心身を鍛えることができる最高の環境だと思います。

中略・・　今回の自然で遊ぶスキルを子どもがもつことで，次世代に受け継ぐことができる，また，子どもたちが「地域愛」をもつことで，住み継ぎができる可能性もあります。親が誘導しなくても，子が自ら地域に残りたい，帰りたいという思考をもつことで，人口減少対策にもつながると考えられます。略・・・

６ おわりに

今回は，**「身近な自然や人とのかかわりをとおして，たくましく生きる力を育む」**ために，いかに**「しなやかな心と体をはぐくむ保育」**を工夫していくかについて考察した。研究の成果として明らかになったことは次の通りである。

① 教師が，自然とのかかわりについての願いやねらいをもち，その意図を幼児の興味や欲求に織り交ぜることで，互いの目的が達成され，心が揺さぶられる体験となる。＜事例１＞

② 教師の一方的な思いを次々と提供するのではなく，幼児の言葉や姿に共感し，認めたり気持ちに寄り添ったりしながら，教師もともに悩み喜べる保育が，幼児の心と対話する保育であり，ともに創り出す保育となる。

また，生活の中で心温まる言動が次第に増えた背景には，自分でも気づかなかった自分の良さや，認められ嬉しかった気持ちを形に表すことで，ずっと覚えていられるということも要因の一つとしてあるのではと考える。その自信が周りを受け入れられる柔らかな心となり，さまざまな経験が実のあるものとなっていった。

③ 今年度は，地域の方から畑を提供していただき，サツマイモ，カボチャの栽培が体験できるようになった。また，イカダプロジェクトでは，休日に，川崎地区の方々が安全のために除草作業を行ってくださった。

四方を山に囲まれた少人数の小規模園である本園は，保護者や地域の方々とともに幼児を育てるという姿勢を大切にしている。幼稚園をオープンにすることで，地域に子どもの様子も伝わり，見守ってくださったり協力してくださったりして安全に様々な活動が展開できている。

こういった親切に感謝したり，人や物に対して大切に思う気持ちをもったりして，人の温かさや地域愛を，自然に触れて遊ぶ中で感じられる保育環境が大切であり，それは，幼児の主体的な活動でなければならないことが，実践を通して強く感じた。

④「身近な自然や人とのかかわりを通して，たくましく生きる力」とはどのような環境や活動によって身につくのかを探ったことにより『人は一人では生きていけない』そのことを，気づかせることが重要である。

以上の成果を踏まえ，これからも更に，保護者や地域の方々と一緒に，将来豊かな夢と広い視野をもち，何事にもチャレンジする力の基となる新たな経験を，幼児とともに創り出していきたい。

参考資料　　幼稚園教育要領解説

研究主題

豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成

～一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを通して～

王地小学校　教諭　濱口　ミヱ

１　はじめに

（１）地域・保護者の実態

本校は，吉野川北岸の三野町に広がる扇状地の美しい田園風景を見渡すところにある。三世代の家族が住み，ゆったりとした雰囲気の中にも基本的な生活習慣や道徳心，礼儀等を重んじる家庭が多い。しかし一方で，行政による企業誘致や若者定住住宅の建設によって，校区の様子にも大きな変化が現れ，核家族化が進み家庭の教育力が低下している現状がある。

保護者・地域の人々の学校教育に対する関心は高く，大きな期待が寄せられている。登下校時にはたくさんの方が子どもたちに声をかけてくださり，学校行事にも積極的に参加してくださっている。常に子どもたちを温かく見守り，地域をあげて子どもたちを育てようという意識が広く定着している。地域の様々な人々と関わりや交流を通して，豊かな心や主体性を育む教育を推進していくには，たいへん恵まれた環境にある。

（２）児童の実態

本校は，６単学級・２特別支援学級の全校児童７３名の小規模校である。全児童のうち，特別支援学級に在籍する子どもたちは７名，通常学級にいる特別な支援を必要とする子どもたちを合わせると，その数は全体の約２５％を占める。

子どもたちは，全体的に温和で優しく，校訓「力いっぱい」のもと，明るく元気に学校生活を送っている。休み時間には，学年の枠を越えて仲よく遊ぶ姿が見られ，高学年の児童が低学年の児童に積極的にかかわろうとする雰囲気が自然とつくられている。

２０年来の花づくりは伝統となっており，１年中パンジーやサルビア，菊などを栽培している。入学式や卒業式の会場を飾る花も心を込めて育てており，仲良く協力することや命の大切さを実感しながら，豊かな心を育み，優しさや思いやりの心を身に付けている。

しかし，教師の指示を待つ子どもが多く，自ら考え主体的に行動したり自分の思いや考えを分かりやすく伝えたりする力は十分ではない。また，６年間を通して単学級であるため，高学年になるほど人間関係が固定化され，友達を多面的に見ることができにくい傾向

がある。一人一人が，それぞれのよさをもっているにもかかわらず，それを自覚していないため，自尊感情を十分にもてない子どももいる。

そこで，本校では昨年度から，研究主題「豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成」のもと，ささやかではあるが確実に実践を積み重ねるよう全職員で取り組んできた。特に人権教育と特別支援教育を基盤に据えた心の教育を中心に，支援を必要とする子どもたちに対する理解を深め，その特性を伸ばすと共に「一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくり」をめざし，様々な取組を進めているところである。

2　研究のねらい

自分も他人も大切にできる「豊かな心」をもち，「主体的に行動する」ためには，自尊感情の育成が必要である。自尊感情は，互いのよさに気付き，認め合う経験を積み重ねることで高められると考える。他者との関わりや交流を大切に「一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくり」をめざして，本研究に取り組むことにした。研究内容は，次の 4 点である。

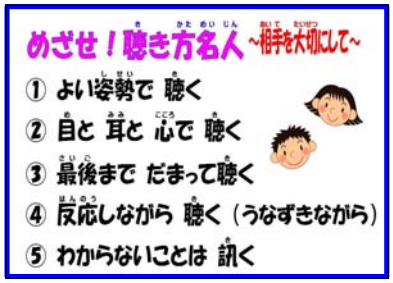
（１）豊かな心や主体性を育てる日常活動の工夫
（２）特別支援学級への正しい理解と啓発の推進
（３）子ども同士の関わりを大切にした特別活動の工夫
（４）家庭や地域・校種間の交流を生かした授業実践

3　取組の紹介

（１）豊かな心や主体性を育てる日常活動の工夫

①学習規律の確立

学習規律の確立は、効果的な教育活動の基盤となるものである。中でも，話を聴くことは「相手を大切にすること」につながる第一歩である。学校全体で確認し，学級でも集会等でも聴き方名人をめざして，繰り返し指導している。児童の聴き方に対する意識を変え，学習規律について共通理解を促進するために，「立腰のすすめ」や「めざせ！聴き方名人」を教室内に掲示し，常に意識付けるようにしている。そして，できている時は機会を逃さずほめ，より意欲的な取組につながるようにしている。



②無言清掃　～心を磨く～

昨年の６月から無言清掃に取り組んでいる。ポイントは「だまって・時間いっぱい・自分から進んで」掃除をすることである。床を磨いたり，すみずみまで気を配ったり，汚れを見つけてとことん向き合ったり，無心になって掃除をしている。今まで一生懸命取り組んでなかったり，おしゃべりをして適当に時間を過ごしたりしていた子どもたちが，教師と共に全校一斉に取り組むことで，真剣に活動し，次は何をしようかと自分で考えて行動することができるようになっている。

③くつをそろえる　～心を整える～

くつをそろえることは，自分の心を整えることである。また，次に使う人のことを考えて行動することであり，他の人が気持ちよく利用できることになる。

「くつをそろえる」という簡単なことを毎日続けていく。そして，それを評価することで子どもたちの自信に変わっていった。下駄箱のくつがそろうようになってから，これまで何度注意してもバラバラになっていたトイレのスリッパがそろうようになり，本棚の本が整えられるようになった。自然に他の活動へと広まり，主体的に行動する態度の育成につながっていると考える。

④朝の読書　～本は心の栄養～

火曜日から木曜日までの週４日間，朝の読書タイムを確保し，全校で朝の読書に取り組んでいる。「本は心の栄養」と言われる。さわやかな朝のひととき，静かに本に親しむことで，豊かな感性や考える力を育んでいきたい。定期的に，教職員による読み聞かせや上級生による紙芝居なども行い，子どもたちの楽しみの一つになっている。

⑤校内の環境づくり　～言葉は心～

校内の環境づくりとして，各教室に友達のよい行いを見つけて書いた「ありがとうの木」や「ふわふわ言葉」などを掲示し，自己肯定感の育成や仲間づくりのための工夫をしている。また，３年生以上は，俳句づくりに取り組んでいる。文字を書いて表現することが苦

手な子どもでも，安心して取り組める。身の周りの自然や自分たちの生活を見つめる，豊かな感性と表現力の育成にもつながっている。

（２）特別支援学級への正しい理解と啓発の推進

①教職員間の連携と共通理解

年度当初の職員研修で，特別支援学級の子どもたちや支援の必要な子どもの特性や学習状況，家庭での様子について教職員全員で情報を共有し児童理解に努めた。そして，学級担任や支援員と「個別の指導計画」の検討を行い，保護者の願いや指導・支援の方向性を確認して共通理解を図った。必要に応じて，巡回相談員等から指導内容や方法について助言をしていただき，一人一人に合った効果的な支援及び指導方法の改善を図っている。

また，低・中・高学年に分かれて交流学級担任と特別支援学級担任，支援員の共通理解を図るため，月に１回開いている「ともに委員会」では，特別支援学級に在籍する子どもたちと周りの子どもたちとの関わり方や学習面で気になること等，情報交換をしている。様々な視点から多面的に子どもを見つめ，仲間づくりを中心に話し合いを進めている。

②特別支援学級の理解啓発授業

保護者の理解と協力のもと，特別支援学級について子どもたちが正しい知識と理解を得るために，毎年４月に意義指導を行っている。特別支援学級（知・情）の担任２人が全学級を訪問し，特別支援学級での学習内容や授業の進め方の説明をしている。在籍している子どもたちが，能力や技能に応じた学習をしていること，それぞれの特性を知りどんな気持ちで見守ったらよいのかなど，子どもの発達段階に応じて理解できるよう具体的に説明をした。どの学年の子どもたちも真剣に話を聴いており，特別支援学級に対する理解を深めるとともに，一人一人の特性を認め，共に成長していこうという気持ちを強くしている。積み重ねによって理解が深まっていくものなので，今後も継続して指導していきたい。

（３）子ども同士の関わりを大切にした特別活動の工夫

本校では，異年齢集団（愛校班）活動が伝統となっている。月２回の清掃活動をはじめ，春の遠足や運動会，集会活動等，異年齢集団での活動を取り入れている。

①異年齢集団による活動

◆わくわくタイム

毎週金曜日，朝の活動「わくわくタイム」では，６年生が中心となり体力向上・仲間づくりを目的に，ゲームや遊びを企画・運営している。６年生は，低学年の児童にルールを分かりやすく伝えるために，言葉を選んだり動きで伝えたり，リーダーとして工夫しながら活動している。

◆ぴかぴかタイム

月２回の「ぴかぴかタイム」では，校舎の外回りを中心に，普段できていない場所の清掃をしている。始めと終わりのあいさつや，道具の準備や後片付け，掃除の仕方など高学年が手本を示すことで，低学年はそれを学び，様々なことを身に付けている。

◆春の遠足

例年，春の遠足も愛校班で行っている。修学旅行の日程に合わせて実施するため，６年生に代わって，バスの中でのレクリエーションをはじめ，自由活動の計画・指揮は５年生が行う。高学年になり，初めてリーダーとしての自覚をもつことを求められる行事である。今年はあすたむらんど徳島へ行った。１年生がけがをしないように手をつないで歩いたり，トイレに連れていったりする姿に，リーダーとしての自覚が芽生え始めていることを感じた。また，自分の役割を果たした後の充実感や達成感を十分に味わうことができた。

【五年生の感想】

遠足であすたむらんどに行きました。バスの中では、手のひら伝言ゲームをしました。みんな迷いながらやっていたので、ちょっとむずしかったかもしれません。

あすたむらんどでは、私が一班のリーダーとして、下級生とくに一年生のお世話をがんばりました。場所が分からなくて少し迷ったけど、一班のみんなのおかげでうまくいきました。

みんなを引っ張っていくのは、とても大変なことだったけど、達成感があって、リーダーもいいなあと思いました。とても楽しかったです。

②集会活動

◆人権集会

年に２回（７月・１１月），児童会が中心となって人権集会を行っている。集会では，「ビリーブ」や「花は咲く」の全校合唱，児童会による絵本の読み聞かせやゲームなどを行った。また，学年ごとの発表では，人権学習で学んだことやこれから自分たちがどう行動していくのかを発表した。大勢の前で堂々と発表できた自信は，自己肯定感を育むことにつながっている。発表を聞く子どもたちも真剣な表情で聞くことができた。

絵本の読み聞かせ

バースデーサークルゲーム

「はしの上のおおかみ」を学習して

「パチパチの花たば」をおくろう

人けんしゅう会で、わたしたちには、それぞれいいところがあることがわかりました。
わたしは、これから自分のいいところも友だちのいいところも大せつにしていきます。そして、二年生の学級をみんななかよしにしていきます。

【２年生の感想】

◆長縄集会

１月には，体育委員会の子どもたちが中心となって長縄集会を行っている。３分間で何回８の字跳びができるか，学年ごとにチャレンジする長縄は，一人や二人が頑張ってもいい記録は出ない。回す人と跳ぶ人のタイミング，跳ぶリズム，跳んだ後の走り抜け方など，全員の気持ちがそろわないと記録は伸びない。ひっかかった後の気持ちのもち方や，縄を回すスピードをどうするかなど，みんなで話し合いながら練習している。全員が，一つの目標に向かって，努力することを通して，互いを思いやり，クラスの絆を深めている。

③委員会・クラブ活動

◆栽培委員会

栽培委員会では，季節の草花を育てたり，毎朝花壇や学級園の水やりをしたりしている。１０月には，環境・ボランティア委員会といっしょに，一人暮らしをされている高齢者のお宅を訪問し，自分たちで育てた菊の花やサツマイモ，そして全校児童が書いた手紙を添

えてプレゼントをしている。毎年，子どもたちの訪問を笑顔で迎えてくださり，子どもたちも高齢者の方とのふれあいを楽しみにしている。

菊の苗の植え替え

菊とサツマイモのプレゼント

◆手話クラブ

手話クラブでは，地域の聴覚障がいのある方から手話を学んでいる。手話で気持ちや思いを伝えるためには，身振りや表情を豊かに表現したり，口も大きく動かしたりしなければいけない。交流を通して，障がいについて正しく理解するとともに，共に支え合って生きていくために，自分たちは何をすべきかを考えながら活動するようになってきている。また，６年生を送る会では，手話を教えてくださっている方や保護者，地域の方を招待し，練習してきた手話コーラスを披露している。

全校で「手話コーラス」

④全校朝会

「学年発表」のコーナーを設け，学年ごとに群読やリコーダーの合奏等，日頃の学習成果を発表し，表現力の向上を図っている。他にも，スポーツ少年団や習い事で活躍した子どもたちが，自分の頑張りを紹介する「輝け！王地っ子」のコーナーを設けている。頑張ったことをみんなに伝え，多くの人に認められる経験は，自尊感情の育成につながっている。また，学校の中では見ることのできない友達の新たな一面を発見するよい機会にもなっている。

学年発表「エーデルワイス」の演奏

「輝け！王地っ子」のコーナー

（４）家庭や地域・校種間の交流を生かした授業実践

①１年生

◆道徳の総合単元「いのちにふれる」

出産直前の１年生の保護者をゲストティーチャーに招き，生まれてくる赤ちゃんに対する親としての思いや願いを聞くことで，自分も友達も大切な命として生まれてきたことを知り，周りの人に感謝する気持ちを抱くことができた。また，身のまわりの小さな生き物や草花・樹木にも同じように命があることを実感し，その命はつながっていることを教えていただいた。

「もうすぐ生まれるよ」

「こんにちは　赤ちゃん」

「木の命もつながっているよ」

②３年生

◆総合的な学習の時間

「出会い・ふれ合い・支え合い ～おじいちゃん・おばあちゃんとなかよくなろう～」

車いす体験や高齢者疑似体験を通して，高齢者の体の変化や不便さを実感することができた。同時に，やさしい声かけや相手の立場に立ったサポートがとても大切であることを学んだ。また，高齢者施設の方と交流活動を重ねる中で，高齢者の思いや願いを理解するとともに，尊敬や感謝の気持ちをもち，共に生きていこうとする態度を育てるために取り組んだ。

高齢者疑似体験

高齢者の方と「ふれあい交流会」

「ふれあい交流会」の発表

③６年生

◆総合的な学習の時間「１２歳のハローワーク」

ＪＩＣＡの職員としてタンザニアで活動された方の話を聴き，異文化理解学習と共にチャレンジすることの大切さを学んだ。また，自転車で日本一周をしている「旅する先生」の出前授業では，体験談から「あきらめなければ夢は叶う」ということを学ぶと共に，自分の未来・夢について考えるよい機会になった。

さらに「職場体験に出かけよう」では，職場体験学習で学んだことを通して，これまで

の自分を見つめ直し，学んだことを今後の生活や学習に生かそうとする意欲をもつことができた。

異文化理解学習

「旅する先生」との出会い

職場体験

④校種間の交流

◆保育所との交流

保育所から小学校への接続がスムーズに行われることをねらいとして，隣接の保育所との交流会を実施している。昨年度は，交流会を合計５回実施し，いっしょに七夕飾りを作ったりゲームをしたり，時には机を並べてペア学習をすることもあった。小学校生活に対して不安を抱いていた保育所の子どもたちも，小学生や小学校の生活に実際に触れることで，入学への期待や見通しをもてるようになった。一方，普段はお世話される側の１年生も，知らないことを教えたり，分かりやすく説明したりすることを通して，自分自身の成長に気付いたり，思いやりの心をもったりすることができるようになった。

◆小中連携事業

中学校とは，昨年度から小中連携事業として，５・６年生の音楽・理科・外国語活動の授業をそれぞれ週に１時間ずつ，中学校の先生が小学校に来て指導してくださっている。専門性を生かした適切な指導助言をいただくことで，子どもたちも興味をもち，主体的に学習に取り組む様子が見られる。

外国語活動

音　楽

理　科

⑤その他の交流活動

９月の王地校区大運動会や２月に行われる「６年生を送る会」の学校行事には，地域の方がたくさん来校し，子どもたちの活躍を見守り応援してくださっている。

また，地域の方をゲストティーチャーとして招き，地域の自然や歴史，人々とのふれあいを大切にした学習や豊かな体験活動に取り組んでいる。交流を通して，子どもたちは，地域の方々の思いや願いを知り，自分たちが住む地域のよさを再認識するとともに郷土愛を育み，主体的・意欲的に活動に取り組んでいる。

王地校区大運動会

三好長慶武者行列まつり

６年生を送る会

さつまいもの苗植え

三村用水の見学

もちつき体験

昔遊びを教わろう

校区探検

昔の道具体験

パークゴルフ交流会

にし阿波環境塾

サロンでインタビュー

4　取組の成果と課題

（１）成果

○　全職員・全児童の共通理解のもと，学習規律の確立に一斉に取り組んだことで，落ち着いた雰囲気の中で，学習や生活ができるようになった。

○　集団行動が苦手な子どもに，「大丈夫」「次はこうするよ」と自分から声をかけ，関わることができるようになってきた。教師が関わるよりも早く，子どもたち自らが，自分に何ができるのかを考えて行動するようになってきており，主体的に判断し行動できる子どもが育ちつつある。

○　異年齢集団（愛校班）活動の積み重ねにより，高学年は学校のリーダーとしての自覚と責任感をもって行動するようになり，低学年は高学年を尊敬すると同時に，よいところを自分に生かそうと努力するようになってきた。また，自分が集団の中で大切にされていることを実感することで，自尊感情や一人一人のちがいを認める思いやりの心が育ってきている。

○　地域の方など，様々な人との交流を通して，子どもたちの学習意欲を高めると共に，人間関係を広げ自ら進んで人に関わろうとする態度が育ってきた。

（２）課題

○　互いに意見を伝え合い学びを深めるために，何でも話し合える学級の温かい雰囲気づくりとともに，あらゆる授業の中で，話し合う場を意図的・計画的に設け，「聴く」力の習得と発表力の向上を図る。

○　授業のめあてや学習の流れを明確に示すなど，ユニバーサルデザインの視点を活かし，全ての子どもにとって「わかりやすい授業」になるよう工夫改善を図る。

○　トラブルが生じた時，自分から相手の気持ちを理解しようと歩み寄る態度や，よりよい関係に改善したり，それを持続したりしていくためのコミュニケーション能力を高める。

○　学校で実施される授業や活動に，ゲストティーチャーとして地域の方々の力を積極的に活用する取組をさらに推進する。

5　おわりに

研究主題「豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成」をめざして，全教職員で実践に取り組んできた。成果は十分に達成できたといえる状況ではないが，子どもたち一人一人が，自分のよさや他の人の大切さに目を向け，自信をもって行動できるようになっていることは確かである。今後も一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを推進していくために，日々の実践を積み重ねていきたい。

研究主題

社会科デジタル教材の開発と活用
～ＩＣＴの有効な活用をめざして～

三好教育研究所　常村　淳

1 はじめに

平成 28 年 4 月 8 日に文部科学省から「2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会」の中間取りまとめが出された。そのなかで，アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を行っていく必要があるということがいわれている。具体的には「主体的・対話的かつ深い学び」という視点である。そして，その実現に向けてＩＣＴを活用した教育を進める必要があるとしている。ＩＣＴ教育の現状としては,学校におけるＩＣＴ機器の整備は年々着実に進んでいる。例として,目標には達していないが,パソコンは 6.4 人に 1 台というところまで普及している。しかし，一方でＩＣＴを活用した授業で有効に活用できる教材（コンテンツ・アプリケーション）が不足していることや，各教科等の学びが深まる教材の検討が十分ではないということが課題として指摘されている。実際に効果的なデジタル教材は必要不可欠である。どの教科においても生徒にとって魅力的なデジタル教材があれば，教員も積極的に授業で使用すると思う。学校現場で情報教育を担当した経験から，これらの課題を解消していくことが，ＩＣＴ教育を推進する上で重要であることを強く感じている。これらの現状をふまえて今後のＩＣＴ教育進展の一助になればと思い，今回の研究に取り組んだ。

2 主題設定の理由

中学校社会科の授業で，今よりも生徒の興味，関心を高めつつ効率よく学習効果を上げるにはどうしたらよいのだろうか。このような考えが普段の授業を行いながら，また，授業の準備をしているときに常に頭に浮かんできた。今までも生徒の興味，関心を高めるための工夫は行ってきた。例えば，授業の最初や社会的事象の説明時にインパクトのある写真，イラストを提示すること，授業内容を復習できるビデオを見せること，難しい用語をわかりやすい言葉で説明すること，板書をわかりやすく構造化すること，作業学習を取り入れること，裏話などがあれば調べておいて説明に取り入れること，授業内容の確認問題をすることなどである。これらを組み合わせて変化のある授業づくりを心がけてきた。

しかし，これらの授業は効果がある反面，授業の準備にかなりの時間がかかるので授業に間に合わないこともたびたびであった。それで，今までの授業の質を落とすことなく，時間のあるときにまとめて作っておき，保存していつでも簡単に出すことができ，古くなれば必要な所だけ修正できる。そして同時に生徒が興味を持つことができる。そのようなシステムがあれば効率のよい授業ができると思った。そして，そのようなことを実現できる方法はないかと考えた時に，急速に環境が整ってきている情報機器（パソコン）を使うと，そのような教材（コンテンツ）ができるのではないかと考えた。パソコンのマルチメディア（文字・写真・動画）を扱うことができるという特性を生かして，その特性を社会科の教材作りに最大限利用し，生徒の興味，関心を高めつつ学習効果を上げることができるデジタル教材の開発をめざして研究を進めた。

3 研究の概要

今回の研究は，まず現状の情報教育環境において実現できる最も有効なデジタル教材の作成方法について調べ，次に実際のデジタル教材を作成し，学校現場で使用する。そして，授業時の自分の手ごたえ，生徒の感想や意見を聴いて改善していくという流れで行うことにした。

また，デジタル教材の効果をわかりやすくするために，1 つではなく数種類のデジタル教材を作成し，授業で使用するようにした。

4 デジタル教材作成

（1）デジタル教材の形式

まず，作成するデジタル教材をどのような形式にするかであるが，作成するどのデジタル教材にもあてはまる共通の事項として，社会科の内容を小単元ごとに細かく分けて作成すること，社会的事象の説明にはなるべく写真・イラスト・動画・アニメーションを使ってわかりやすくすること，おもに地理的分野で，数値データが入手できる事柄については統計地図を作成して入れること，確認問題などを入れること，時間の流れは，矢印とページをめくっていくことで表現することなどパソコンで実現できそうな形式にすることを考えた。そして，プレゼンテーション作成ソフトで作成した教材と同じように，パソコン上でページをめくると次の学ぶ内容が表示されるような形式を選択した。これらの機能を１つのシステムで実現するためには，文字と画像の両方とも扱うことができ，タイムライン上でアニメーションを作成できるソフトが適していると思い，これを採用して作成することにした。

（2）デジタル教材の内容

○小単元ごとの構成

右図は，作成したデジタル教材（地理）の最初のメニューページであるが，単元構成は，中学校社会科（地理分野）の基本的な教育課程に沿った形で構成した。ここで，ある地方の小単元名を提示しておき，各小単元のページへのリンクを設定しておくことで，小単元名を選択するとその学習ページを表示することができるようにした。このようにすることで，授業の復習をする時に自分が一番復習したい小単元をいつでも簡単に表示することができる。生徒が，授業後にわからない所をもう一度写真や統計地図などを見て復習したいという気持ちが強い時，つまり学習効果が一番上がると思われる時に，パソコンですぐに復習できるシステムが効果的だと考えた。

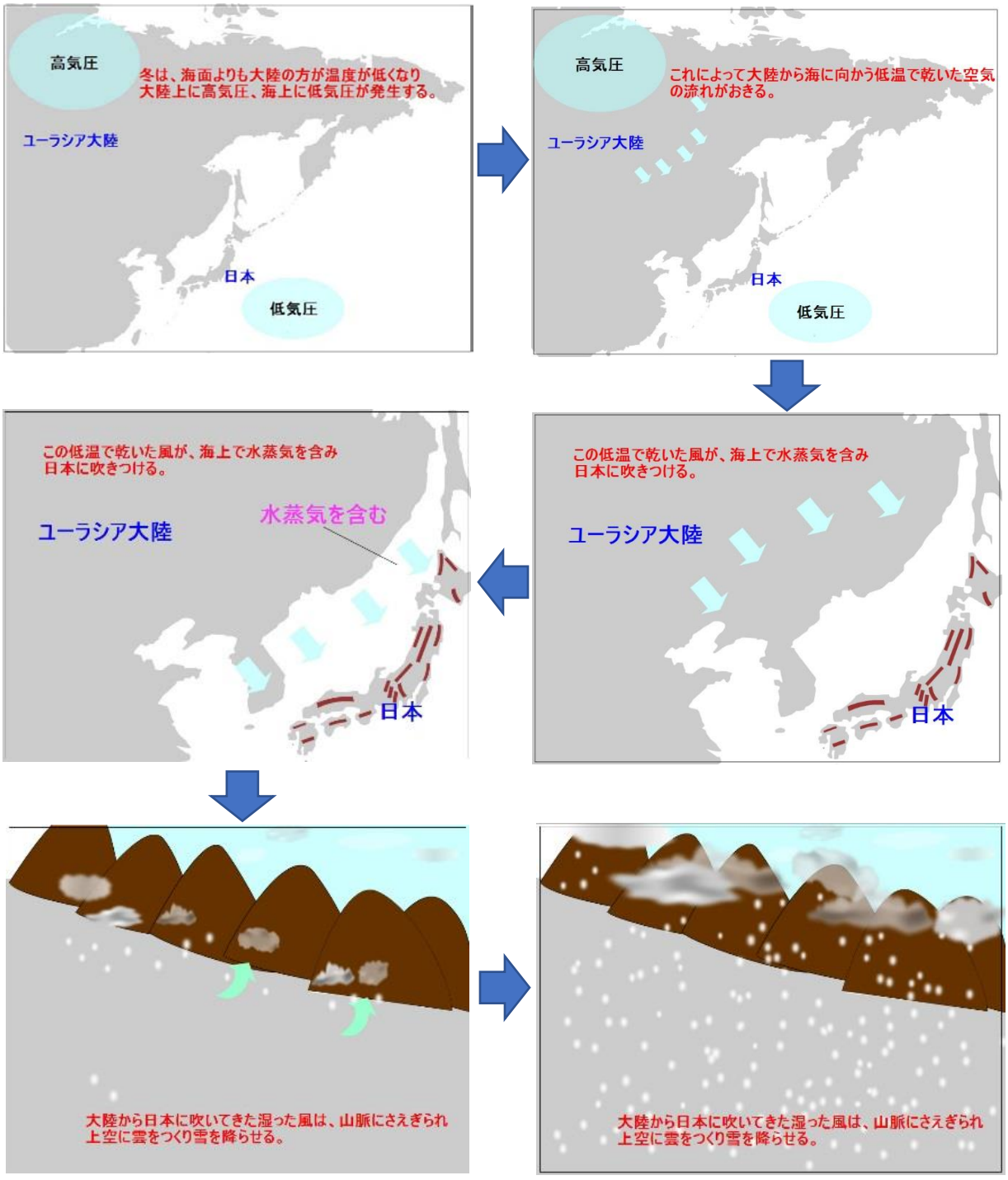
○写真

社会科では，自然，文化，産業など言葉で説明するだけではわかりにくい事象がたくさんある。このような時に写真を見せることは非常に有効である。前もって写真をパソコンに取り込んでおき，写真を大きく表示しながら説明することで，生徒全員の注目が写真に集まり，集中させることができる。また，パソコンに取り込むことで，下図（みなとみらい２１地区）のように名称や解説をあらかじめ入れることができる。さらに，簡単に拡大することができるので，

細部を見ることができ，そこから生徒に気づいたこと，疑問に思ったことなどを発表させることもやりやすい。

○アニメーション

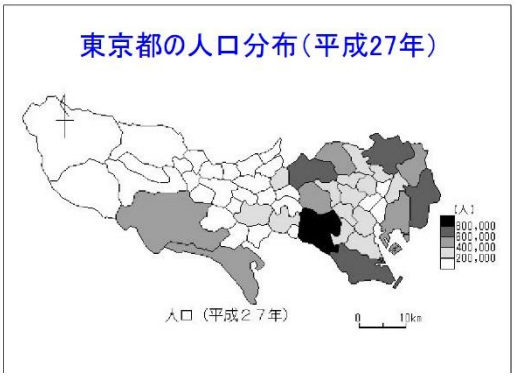
地理的事象の中には，言葉や写真での説明では，わかりにくい内容のものがある。そのような地理的事象は，アニメーション化することでわかりやすく



表現することができる。上の図はそのような例で，日本地理での気候の学習時によく登場する北西の季節風だ。これは，冬のユーラシア大陸側は低温のため高気圧が発生し，海側に低気圧が発生する。そして，高気圧から低気圧への空気の流れがおこり，その流れが日本海上で水蒸気を含み，日本列島に吹きつける。そして中央高地の高い山脈にあたり雲を発生させて雪を大量に降らせる。という自然現象だが，これを言葉だけで説明することもできるが，アニメーションを見ながら言葉で説明することで，生徒はより納得することができると考えた。また，アニメーション化することで何回でも再生することができるというメリットも生じる。

○統計地図

地理的分野では，統計地図を用いると，その地域の様子をわかりやすく表現できることが多い。右の図は，その例である。



関東地方の学習では，東京の都心への人口集中による過密問題や周辺地域の人口増加など，人口に関する学習が必須となっている。東京都の中心部への人口集中を見るには，東京都の各地域の人口の多少を色分けして見ることができる統計地図があれば，地域的な特徴を視覚的にとらえることができる。

以上のことから，総務省の統計局が発表している人口などのデータをもとにして統計地図を作成することができるＧＩＳソフトを使って，右図のような統計地図を作成した。

もう一つの例として，東海の市町村別の工業出荷額を統計地図にして表した。このように都道府県，市町村の数値データさえあれば統計地図を作成してわかりやすい資料を提供することができる。

○確認問題

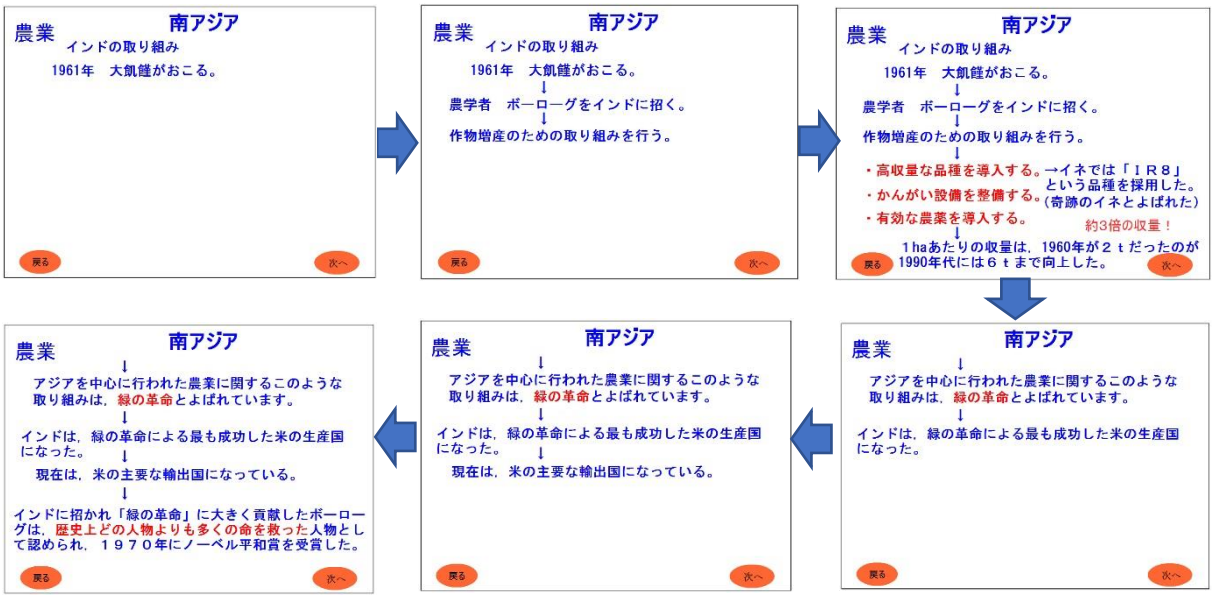
事前にデジタル教材の中に確認問題を入れておき，単元の終わりに取り組むことができるようにした。また，答えは各自のノートに書くように設定した。問題には，文字だけでなく地図や写真などの資料を入れてわかりやすくした。

○時間の流れの表現

ある社会的事象の成立過程を説明する際，時間の流れに沿って出来事を説明したほうがわかりやすい場面がある。そのような時に，ページをめくることと矢印で時間の流れを表現するようにした。下の図は，南アジアの稲作の発展を簡潔に説明したものである。ページをめくっていき，そのときの政策や出来事を言葉と矢印で表すことで，南アジアの稲作がどのように進展していったのか，その過程をわかりやすく表した。

黒板に矢印を使って書いていくのと比べると，パソコンの画面でページをめくっていくことで，生徒の注目が画面に集まりやすくなる。結果として学習により集中して取り組むことがで

きると考えた。



5 実践１

（１） 授業

第１学年　中学校社会科（地理分野）学習指導案　題名　アジア州の自然環境

☆はＩＣＴを活用

	学　習　活　動	指導上の留意点	備　考
導入	・アジア州の５つの地域区分を地図で確認する。	・５つの地域別に色分けした地図を表示し，それぞれの地域の代表的な国を答えさせる。 ☆ＰＣ・テレビを使用して地図を提示	略地図
展開	・山脈・高原・河川などの自然環境を地図で確認する。	・内陸の高地から大河川が流れ出し，流域に広がる平野は，農耕地になっていることを理解させる。 ☆ＰＣ・液晶テレビを使用して写真を提示	略地図 写真
	・大陸の東側は，火山や地震の多い島々が並んでいることを確認する。	・環太平洋造山帯の図を見せて説明する。 ☆ＰＣ・液晶テレビを使用して図を提示	図
	・大陸からは，インド半島・インドシナ半島・アラビア半島などの半島がつき出ていることを確認する。	・インドシナ半島からはマレー半島がのびていること，アラビア半島は砂漠におおわれていることを地図で説明する。 ☆ＰＣ・液晶テレビを使用して写真を提示	略地図 写真
	・白地図で作業を行う。	・山脈，河川などの名称を記入させる。	白地図

展開	・アジア州には，熱帯・乾燥帯・温帯・亜寒帯（冷帯）・寒帯のすべての気候帯がみられることを確認する。	☆ＰＣ・テレビを使用して気候帯図を見せてアジア州の気候帯の区分を確認させる。	気候図
	・それぞれの都市の雨温図からその気候の特色を発表する。	・５つの気候帯にあてはまる都市の雨温図を見せて，それぞれの特色を発表させる。 ☆ＰＣ・テレビを使用して各都市の雨温図を提示	気候図 雨温図
	・季節風（モンスーン）についてのアニメーションを見る。	・アニメーションを見せながら言葉で補足する。 ☆ＰＣ・テレビを使用してアニメーションを提示	アニメーション
	・季節風の影響を受ける地域と受けない地域ではどのような気候の特色が見られるか考察する。	・地形や雨温図と関連付けながら考えさせる。 ☆自分のＰＣで地図や雨温図を見るように指示する。	略地図 雨温図
	・確認問題に取り組む。	・最初は，教科書などを見ないで解くようにさせる。 ☆各自のＰＣに問題を入れておく。	確認問題

（２） ＩＣＴを使った授業の成果と課題

アジア州の自然環境についての授業実践を行った。授業に際しては，上記で説明したような方法でデジタル教材を作成し，写真，アニメーション，地図などの資料をパソコンからテレビに出力した。生徒の感想は次のようなものである。

（生徒の感想）

・言葉だけの説明ではなく写真などが豊富だったのでとてもわかりやすかった。
・パソコンを使ったので，新鮮だった。
・図の細かいところを拡大できたのでとても見やすかった。
・アニメーションで見ると，季節風の仕組みがよくわかった。

以上のような生徒の感想を見ると，パソコンを使ったことでわかりやすい授業ができたと思う。一斉授業で教師が前でしゃべるだけの授業との大きな違いは，文字，写真，アニメーションなどのマルチメディアを用いたことである。このような教材を使った授業では，生徒の興味，関心が高まり，集中して授業に取り組ませることができる。あらためてＩＣＴの効果を認識できた。

しかし，生徒の反応を注意深く見てみると，授業の前半はとても集中して取り組めているが，徐々に集中力が途切れてきているような様子が見受けられた。授業をしているこちら側も何かが足りないように感じていた。その理由を考えてみると，それは，生徒の動きがないというこ

とである。パソコンでマルチメディアを活用した授業だが,すべて一方向の授業になっていた。つまり教師が提供した教材を生徒が見る授業ということである。では，これを一方向ではなく双方向にするにはどうしたらよいか，という課題がでてきた。

6 インタラクティブ　コンテンツ

（1）インタラクティブ　コンテンツとは

ＩＣＴ授業には大きく４つの教育的な利点が考えられている。それは次のようなことである。

○インタラクティブな道具としての利点

○通信手段としての利点

○マルチメディアとしての利点

○共有可能なデジタルデータとしての利点

ではこのインタラクティブとはどういうことかというと，インタラクティブとは「使う人の働きかけに応じることができる」という意味である。キーをたたけば文字が出るし，マウスを動かすことによって絵を描いたりすることができるということである。「双方向的に働きかけることができる機能」といえばよいであろう。と説明されている。ゲームのように自分の操作に反応するから興味がわくということである。この利点を生かして，今までのデジタル教材を一方向型から，いわゆる「インタラクティブ　コンテンツ」といわれる双方向型のデジタル教材に修正することにした。

（2）インタラクティブ　コンテンツの作成方法

作成の具体的な方法としては，インタラクティブ　コンテンツ作成ソフトを使ってプログラミングすることにした。スクリプト言語を用いるので，比較的容易にプログラミングすることができる。作成したコンテンツは，主にボタン操作によって写真，アニメーション，統計地図，ビデオなどが表示されるというような双方向的に使えるようにすることを考えた。

7 実践２

（1） 授業①

第２学年　中学校社会科（地理分野）学習指導案　題名　中部地方

○学習指導計画（６時間）

・中部地方の自然環境・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間（本時１/１）授業①

・輸送機械工業がさかんな東海・・・・・・・・・・・・１時間（本時１/１）授業②

・東海の農業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

・中央高地の産業の移り変わり・・・・・・・・・・・・１時間

・北陸の産業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

・学習のふりかえり・・・・・・・・・・・・・・・・・・１時間

○単元目標

・三つの地域でそれぞれ特徴的な生活文化や産業が発達してきたことを，自然環境などとの関わりを通して意欲的に理解しようとしている。（関心・意欲・態度）

・三つの地域で発達している産業の違いに注目し，その理由や背景を考察し，自分の言葉で表

現している。（思考・判断・表現）
・様々な地図や資料から三つの地域のそれぞれの産業の特色や変化を適切に読み取り，まとめることができる。（技能・表現）
・自然環境などにより三つの地域に分かれ，それぞれが地域の特徴を生かした産業を発達させ，その後違った産業に変化していったことを理解し，その知識を身につけている。（知識・理解）

○本時の目標（授業①）

中部地方の地形や気候の特色を知り，三つの地域でそれぞれ特徴的な生活文化や産業が発達したことに自然環境の違いが関連していることを理解する。

○展開　　☆はＩＣＴを活用

	学　習　活　動	指導上の留意点	備　考
導入	・中部地方が９つの県から構成されていることを確認する。	・略地図上に示した県名を答えさせる。 ☆ＰＣ・テレビを使用して地図を提示する。	略地図
展開	・中央には日本アルプスとよばれる３つの山脈があり，火山も点在していることを確認する。	・地図上で位置を確認させながら指名して発表させる。 ☆ＰＣ・テレビを使用して略地図・写真を提示する。・・・① ☆日本アルプスをＰＣで答えさせる。・・②	略地図 写真
	・おもな河川，盆地，平野を確認する。	・中央の山々から多くの河川が流れ出し，上流では盆地，下流では平野をつくっていることを説明する。 ☆ＰＣ・テレビを使用して略地図・写真を提示する。・・・①	略地図 写真
	・中部地方が３つの地域に分けられることを確認する。	・自然環境の違いによって分けられていることを説明する。 ☆ＰＣ・テレビを使用して図を提示する。	図
	・雨温図を見て，３つの地域の気候の特徴を理解する。	・３つの地域の雨温図を見て，特徴をとらえさせる。・・・② ☆ＰＣ・テレビを使用して略地図・雨温図を提示する。 ☆気候の特色をＰＣで答えさせる。 ☆ＰＣ・テレビを使用して写真を提示する。・・・①	略地図 雨温図 写真

	・季節風の仕組みを知り，その影響について理解する。 ・確認問題に取り組む。	・アニメーションを見せ，季節風の仕組みとその影響について理解させる。 ☆ＰＣ・テレビを使用してアニメーションを提示する。・・・③ ・最初は，教科書などを見ないで解くようにさせる。 ☆各自のＰＣに問題を入れておく。	アニメーション

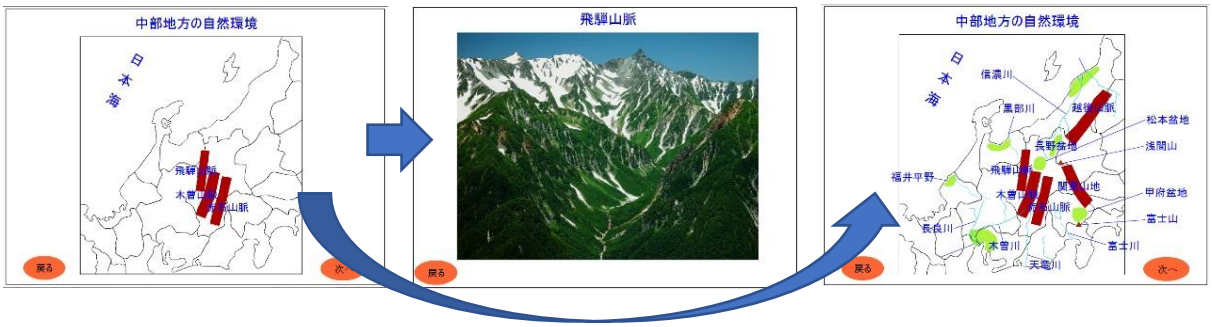
（２） 改善点

① 写真

写真は，略地図と連携させて提示することとした。この授業の例では，略地図中の地形名がボタンになっており，このボタンを押すことで，すぐに写真が表示されるようにした。これにより中部地方における地形の位置と名前と写真を連携させることができるようになった。

また，双方向型にすることで，自分の確認したい地形をボタン操作でいつでも見ることができることになり，生徒の興味，関心も高まると予想した。さらに，他の地形とすばやく比べることができ，中部地方の地形の大まかな全体像を思い浮かべることが容易になると考えた。

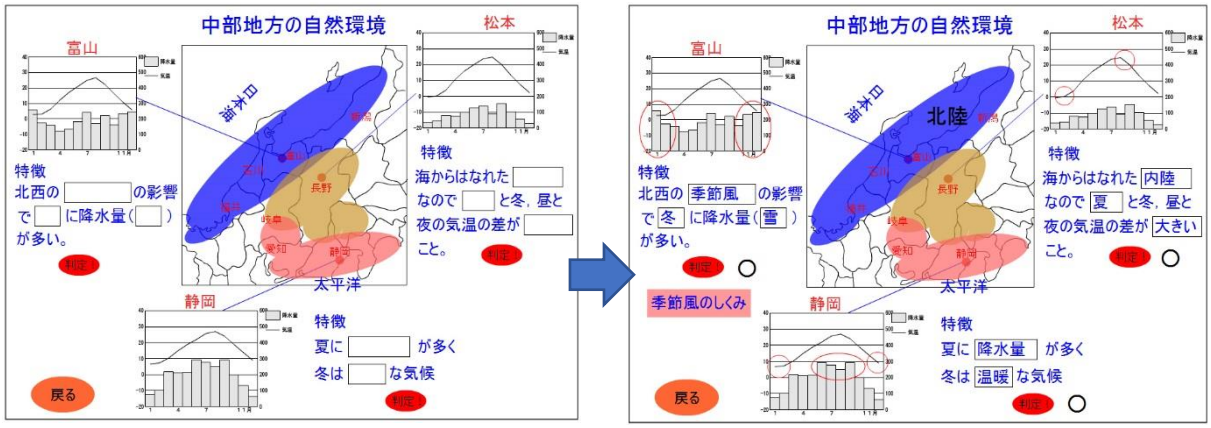
地形の確認は，この図のように山脈，河川，盆地，平野など同じような地形をまとめて順番に表示し，言葉での説明を平行して行うこととした。



② 設問

今までは，覚えさせたい重要な用語は，それについての質問をして答えさせるというようにして記憶に残るようにしていたが，双方向型の教材にするために画面上に問題を表示し，入力欄を作ってそこに答えをキーボードで入力できるようにした。そして，事前に答えを仕込んでおき，判定ボタンを押すと答え合わせができるようにした。具体的には正解であれば○と音声，不正解だと×と音声が流れるようなシンプルなものである。このようにした理由は，操作に迷うようなものだとパソコンの操作にばかり気持ちが向いて，授業内容に集中できないと考えたからである。生徒がはじめてでも直感的に操作できるものが理想的である。

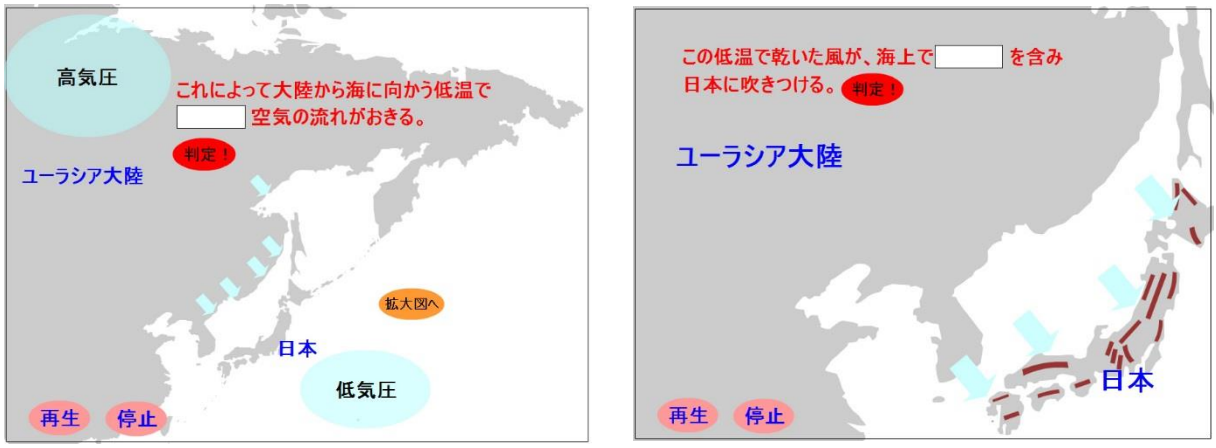
この機能を使って，授業中に確認として小問題を入れたり，考察したことをまとめたり，それをもとにして班で話し合うなどの使い方ができる。また，単元の復習問題を作成し，ヒントを見ながら解答することもできるなど授業の幅を広げることができるようになった。下の図は，その例である。



これは，中部地方の気候の特徴をまとめる画面であるが，ここでは「特徴」という文字（ボタン）を押すと雨温図上に注目させたい所が表示されるようにした。この注目点は，設問を解く際のヒントにもなっている。そして北陸（富山）の欄を入力し正解すると「季節風のしくみ」ボタンが現れ，このボタンを押すと季節風のしくみを解説するアニメーションが再生されるようにした。

③　アニメーション

上記のアジア州の自然環境の授業では，季節風が吹く仕組みをアニメーションで見せるだけだった。これだけでも大部分の生徒は「よくわかる」と言っていたが，これに双方向性をもたせることで，季節風の仕組みについて想像力を働かせることができるように設定した。具体的には，ボタンで自由に再生，停止できるようにし，途中に穴埋め問題を入れることである。問題作成の際には，ある程度の思考力が必要な問題になるように心がけた。



（３）　授業②

○本時の目標（授業②）

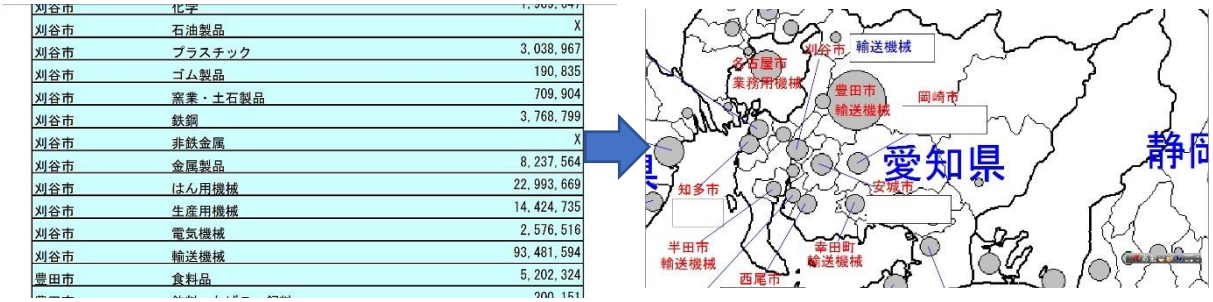
・東海の工業の中心が繊維業から輸送機械工業へと変化し，大きく発展した過程を知り，その背景や理由を考察することによって，工業地帯の成り立ちを理解する。

○展開　　☆はＩＣＴを活用

	学　習　活　動	指導賞の留意点	備　考
導入	・東海は，綿花の栽培がさかんで綿織物業が栄えていたことを確認する。	・綿花と綿織物の写真を提示し，生徒を指名して答えさせながら説明する。 ☆ＰＣ・テレビを使用して略地図，写真を提示する。	略地図 写真
展開	・綿織物業の隆盛と衰退の過程をたどっていく。	・問題を解いたり，考えをまとめたりしながら綿織物業の概要について理解させる。 ☆綿織物業についてＰＣ上で答えさせる。	
	・自動車メーカーの生産体制と生産方式について学習する。	・指名して答えさせながら説明する。 ☆ＰＣ上で図を見せながら説明する。	図
	・東海の工業出荷額の統計地図を完成させ，そこからわかることを考察する。	・作業の仕方をわかりやすく説明する。 ☆ＰＣ・テレビを使用して統計地図を提示し作業させる。・・・①	統計地図
	・日本最大の中京工業地帯や東海工業地域が形成されていることを理解する。	・輸送機械工業が中心であるが，他の工業もあり，また，新しい産業も芽生えていることを説明する。 ☆ＰＣ・テレビを使用して略地図を提示する。	略地図
	確認問題に取り組む。	☆各自のＰＣに問題を入れておく。	

（４）　改善点

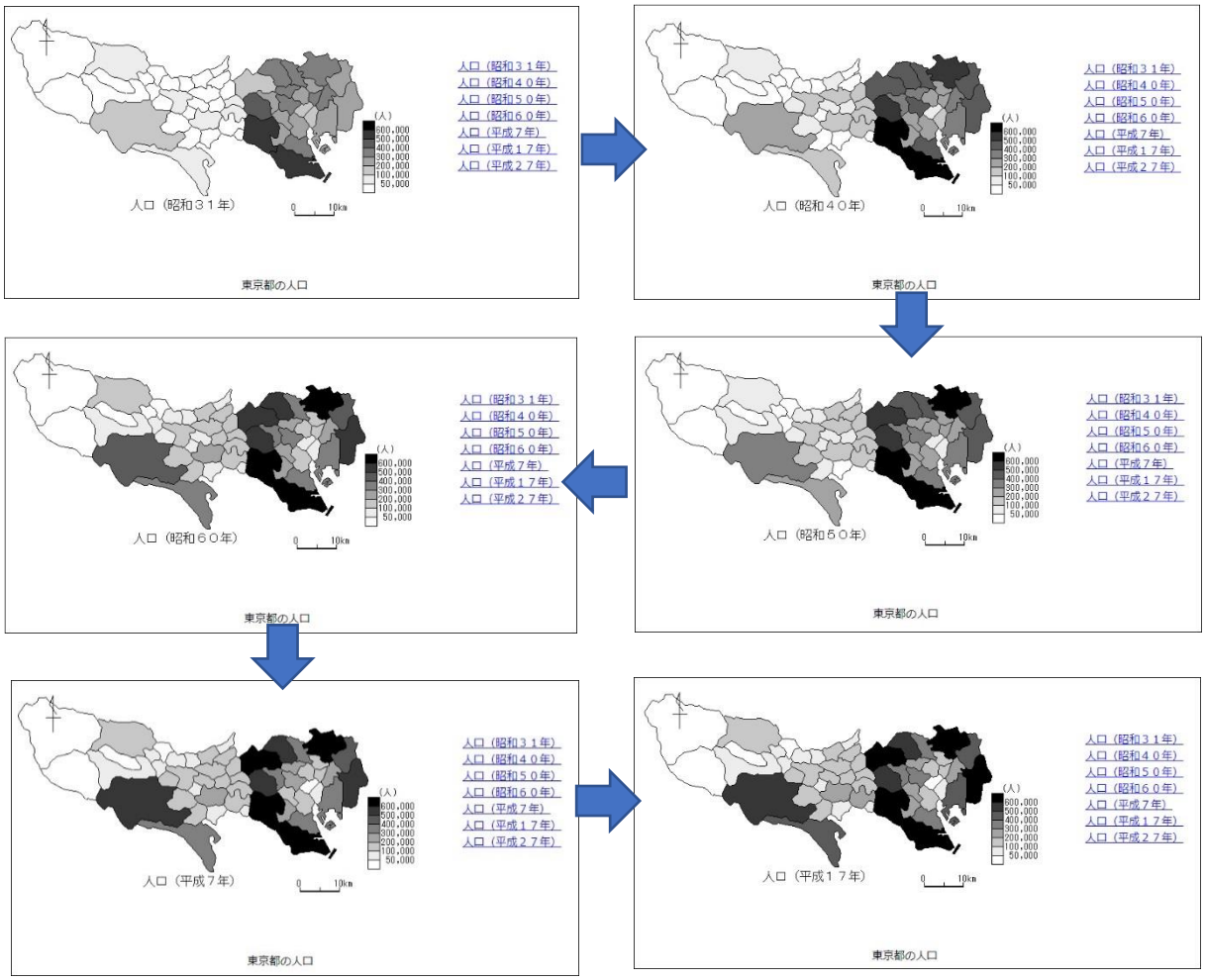
①　統計地図



この授業の例では，上図のように東海の工業出荷額についての統計地図のなかに，ある都市の中心になっている（出荷額が大きい）工業名を統計表で見て入力する。という作業をパソコ

ン上で行うようにしている。工業出荷額の統計地図をただ見せるというだけでなく，作業学習にするメリットとしては，よりわかりやすく詳しい統計地図にすることができること，統計地図の内容の特徴を捉えやすくなることであると考えている。これをパソコン上で行うことで効率よく作業できると想定して授業に取り入れた。

本時の授業ではないが,もう一つ統計地図の改善例として東京都の人口についてあげておく。これは東京都の人口分布を過去のデータと比較できるようにしたものである。図中の右側の年代にマウスを重ねると，すぐにその年の人口分布図に切り替わるようにすることで双方向型になるようにした。マウスを動かす早さによってアニメーションを見るようにでき，人口分布の変化をわかりやすく捉えることができる。



（５） 生徒の感想

・パソコンを操作しながらできるので新鮮だった。
・ボタンで写真などをすぐに見ることができるのでわかりやすかった。
・授業がとても短く感じた。
・パソコン上で問題を解いて，すぐに答え合わせができるのがいい。
・図やアニメ，ビデオなどが多くあるのでとてもわかりやすかった。
・ヒントを見ながら確認問題ができるのがよかった。
・集中して確認問題に取り組むことができた。

・確認問題をやるのが楽しかった。
・授業に集中できた。
・作業学習のときの操作が初めわからなかった。
・難しくて解けない問題があって先へ進めなかった。
・答え合わせのとき間違えたら正解を表示してほしい。

8 研究の成果

・生徒の授業への関心・意欲を高めるために，インタラクティブ（双方向）コンテンツが有効であることがわかった。
・授業を通して，どのような場面でＩＣＴを使うのが効果的なのかをつかむことができた。
・双方向型にすることで，生徒が活動する場面があり，授業に変化をつけることができた。その結果，生徒の授業への集中力が高まった。
・基礎的な知識を定着させるためには，パソコン上で確認問題を解かせ，すぐに答え合わせでき，また，何回でも問題に取り組むことができるシステムが有効であることがわかった。

9 研究の課題

今回の研究では効果的な授業にするために，どのようなデジタル教材を使えばよいのかという視点でデジタル教材の開発に取り組んだ。そして，教材をデジタル化して提示することから一歩進めてインタラクティブ（双方向）性をもった教材を作成し，これを使って授業実践を行った。課題としては，アクティブ・ラーニングの視点いわゆる主体的，対話的かつ深い学びに具体的につながっているのかがはっきりしていないことだと思っている。今回作成したデジタル教材は結果的に，わかる授業や基礎的な知識の習得という部分で効果があったが，主体的・対話的・深い学びという３つのキーワードを満たしているとはいえない部分がある。

ＩＣＴを使った授業の効果をさらに高めるためには，この３つのキーワードに沿った形のデジタル教材とはどのようなものかを研究して明確にすること。そして，それに沿ったデジタル教材を開発し，授業実践，評価を行っていくことが必要である。このような観点で今後も研究を継続していきたいと思っている。

〈参考資料・参考文献〉

・『2020 年代に向けた教育の情報化に関する懇談会』の中間取りまとめ
・『ＩＴ活用で，授業はここまで進化する』（明治図書）熊本大学教育学部付属小学校　著

研究主題　生徒の意欲関心を高め，豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～

三好教育研究所　宮成万寿美

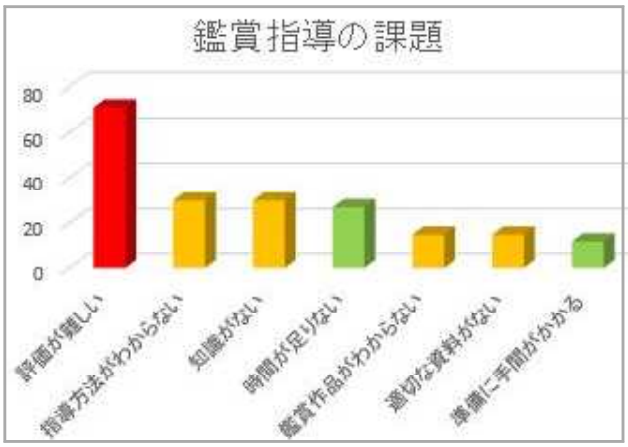
１　はじめに

美術の楽しみをもっともっと子どもたちに伝えたい。そして，美術で学ぶことや美術でしか学べないことを通して自己肯定感を育てたい。そんな思いをもって，これまで美術教育に携わってきた。「きれい！」「おもしろそうだ！」「もっと見てみたい！」「つくってみたい！」と思えるような「わくわく感」のある作品との出会いを大切にし，表現や鑑賞の活動を通して，自分のつくった作品を大切に飾ったり残しておいたりできるような“思いを込めたものづくり”や「この作品のここが好き」と言える“私のお気に入りの発見”をさせたいと思っている。

２　研究のねらい

美術科では，「表現や鑑賞の幅広い活動を通して，創造することの楽しさを感じながら，造形的な創造活動の基礎的能力（想像・発想・判断する力や表現する力）を伸ばすとともに，生活の中の造形や美術文化に関心をもち，美術を愛好する心情や豊かな感性を育成すること」を目指している。これまでも，「ひと」「もの」「こと」そして「自分」との関わりの中で「よさ」や「価値」を発見していくような主体的な学びや体験を重視して取り組んできたが，アクティブ・ラーニングの視点からも，更に生徒一人一人の感性や想像力が働くような「自分なりの見方や感じ方・批評」「自分らしい表現」を深める学習指導の改善・充実が求められている。そのためには，視覚だけでなく五感を十分に働かせながら形や色彩等の性質や感情・イメージ等を豊かに感じ取り表現すること（造形的な視点について実感的に理解できる学習）や，自分の思いや価値意識をもって作品に向かい合い他者と対話すること（意見を交わすことにより自己の確認ができる学習）が大切であると考える。“豊かな鑑賞が表現を広げ，また多様な表現が鑑賞を深める”という「表現と鑑賞の関連」を根底に据えて，表現活動だけでなく，「積極的によく見る鑑賞」「自分の思いや考えを表す対話的な鑑賞」の充実を図り，生徒の意欲関心を高め豊かな感性や思考力を育てる主体的な学びのある授業を工夫したいと考えた。

三好地区小中学校の図画工作科・美術科担当の教員を対象に昨年度実施したアンケート調査の回答から，表現の指導に比べて鑑賞の指導への取り組みが全体的に消極的であることが分った。また，その理由として「指導方法がわからない」「知識がない」「鑑賞する作品が分からない」「適切な資料がない」「準備に手間がかかる」等の課題があげられた。（図１参照）

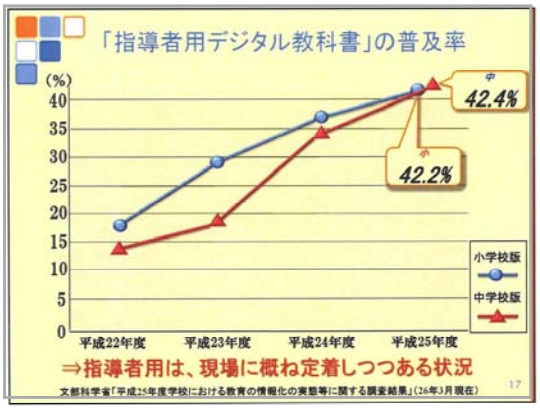


（図１）

聞き取り調査の結果からも，「小学校では専門の教員が少なく研修の機会もあまりないため，どのように指導すればよいのかわからない」「中学校でも小規模校においては免許外の教員が担当しており指導が難しい」という実態が明らかになった。評価の困難さに対する

「評価規準や評価方法」の工夫改善も大きな研究課題ではあるが，まずは鑑賞の実践が最重要課題であり，「題材の決定と鑑賞作品の選択」「授業展開や指導の方法」「鑑賞作品の資料・教材の準備」等に対する研究や検証が必要であると考えた。

また，今，児童生徒の学習意欲の向上のためにＩＣＴの活用が推進されている。様々なデジタル教材やデジタル教科書等が発行されているが，学校現場で普及が進んでいるのは，普通教室における授業で主に教師が使用する「指導者用デジタル教科書」である。（図２参照）これは一斉指導型授業スタイルをベースに開発されたもので，授業を分かりやすくサポートするための提示型教材である。「学習情報の共有化」「話し合い活動の活性化」「学習内容の焦点化や視覚化・音声化」等において，児童生徒の興味関心を高めるとともに，理解を容易にし学習を深める（特に低位層の生徒の学力向上）という点で効果を発揮している。美術科のデジタル教科書については，表現領域では様々な表現技法や道具の使い方等を動画で確認できたり，鑑賞領域では作品の図版等が比較的豊富に収録されていたりと，その利用価値は高く，授業準備の効率化も図ることができる。しかし，残念ながら今現在三好地区においては，小中学校ともに国語等の５教科しかデジタル教科書は導入されておらず，ＩＣＴを有効に活用して学習指導ができているとは言い難い。



（図２）

これらの実態や現状を踏まえ，美術科における「主体的な学び」のための一手段として，「提示型デジタル教材」（主にプレゼンテーションソフトによる）の作成・活用を試みた。デジタル教材ならではのメリットを考え，使用することにより生徒の意欲関心を高めるとともに，理解を助け，さらに思考力・発想力・判断力が深まるようなものが望ましい。表現・鑑賞の学習ともに，どのような力を身に付けさせたいのか，そのためにどの領域・題材でどのようなデジタル教材が必要であるのか，「育てたい資質・能力」や「デジタル教材の有効性」を明確にして教材を作成することが大切である。また，作成したデジタル教材をどの場面でどのように提示するのか，「授業での効果的な使い方やその位置付け」を工夫することも重要である。特に独立した鑑賞の授業では，どのような学習目標をもって，どのような題材で，どの作品や資料を鑑賞対象として使用するのか，「学習のねらいに合った題材や鑑賞作品の選択決定」に留意して鑑賞資料の充実を図りたいと考えた。そして，アクティブラーニングの視点も取り入れて，どのような鑑賞形態や学習活動で対話を広げたり学習を深めたりするのか，「生徒が主体となる授業展開や指導方法」を構想することが必要であると考え，本研究に取り組んだ。

〈研究仮説〉

表現や鑑賞の指導において「提示型デジタル教材」を活用することにより，生徒の関心意欲の向上や主体的な学習を図るとともに，造形要素の理解や対話を促進し，「見る力」「考える力」「表す力」等の美術の基礎的な能力や豊かな感性を育成することができるのではないか。

３　研究の内容と実践

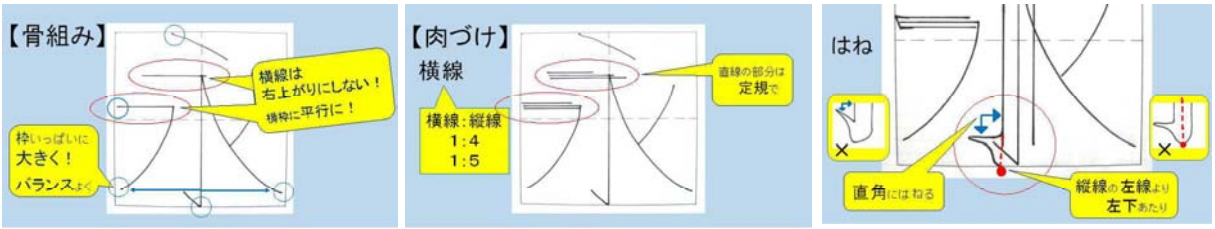
（１）表現の活動における提示型デジタル教材の作成と活用について

表現のデジタル教材は，色の基本に始まり，明暗や陰影のとらえ方，水彩画の表現技法や遠近図法の描き方，木彫や陶芸の技法，彫刻刀等の道具の使い方等，絵画・彫刻・デザイン・工芸のどの領域においても多岐にわたる。特に技法や道具の使い方については，画像だけでなく音声説明の付いた動画等，視覚情報として非常に分かりやすいものが多い。見たい画面を静止させたり，同じ箇所を何度でも繰り返して見たりできることもその利点である。また，その活用は，授業中の説明に係る時間短縮だけでなく，教員の授業準備に係る負担軽減にもなる。しかし，実際に自分が授業で利用するとなると，更に部分的に特化して具体的に説明したい内容や更に補足して詳しく伝えたい内容があったり，逆に，もっと要点だけを端的に整理して伝えたい場合があったりと，指導者の意図や生徒の実態によっては扱いにくい面もあるのが難点である。今回は，主に能力的に低位の生徒や支援の必要な生徒の理解を深めることをねらいとして，併せて高い技術を必要とする生徒への対応も含めて，デザイン領域を中心にデジタル教材の作成を試みた。

子どもたちの実態として，表現活動自体は好きであるが，自分で考えたり工夫したりすることを苦手とする生徒が多い。また，試行錯誤しながらより美しい表現や自分らしい表現を追求することを面倒と考える傾向にある。特に，表現活動の始まりにおける発想や構想が困難な場合が多く，自分の表したいことやイメージが決まらないことが多々あるのが実状である。「自分らしく表現する」ためには，まず「こんなものがつくりたい」「こんな感じに表したい」という創造活動や表現活動に対する「思い」をもつことが重要である。しかし，生徒がこれまでの自分の経験からその「思い」に繋がる素材を引き出したり生み出したりすることはなかなか難しい。よって，表現活動の要所要所で「見ること」を効果的に取り入れ，作品や表現方法・材料等に出会わせることが大切である。様々な「もの」を見ることを通して，「自分だったらこれがいい（こんな感じが好きだ)」「自分の気持ちやイメージに合っているものはこちらだ」と色や形，表現方法や材料を選択し，テーマやイメージを一つずつ絞り込みながら決定し，「自分の思い」を明確にしていく必要がある。また，様々な「ひと」との対話や交流を通して，自分では思いつかなかった表現を参考にするなどして表現の幅を広げたり，他者との比較の中で「自分らしい表現」を見いだしたりすることができる。デザイン領域において，「見ること」を効果的に取り入れ，色や形の性質や感情を基にイメージを視覚化し，生徒の発想や構想の能力を高めていくことをねらいとして次のようなデジタル教材の作成に取り組んだ。

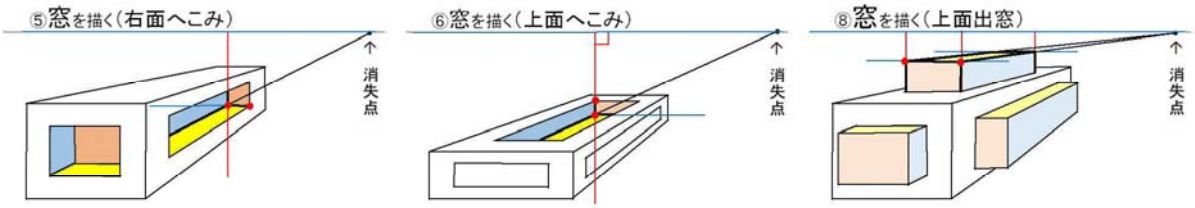
①レタリング（基本書体の特徴・描き方とポイント）
②色の性質（対比・膨張伸縮・トーン・色の意味）
③斜投影図法・等角投影図法の描き方
④一点透視図法・二点透視図法の描き方
⑤平面構成における構図のとり方（消失点の位置や水平線の向きを考えて）
⑥平面構成における配色計画の立て方（光と影の効果・構成やイメージによる）
⑦線織面の描き方と配色計画の立て方

【①「レタリング」（基本書体の特徴・描き方とポイント）】

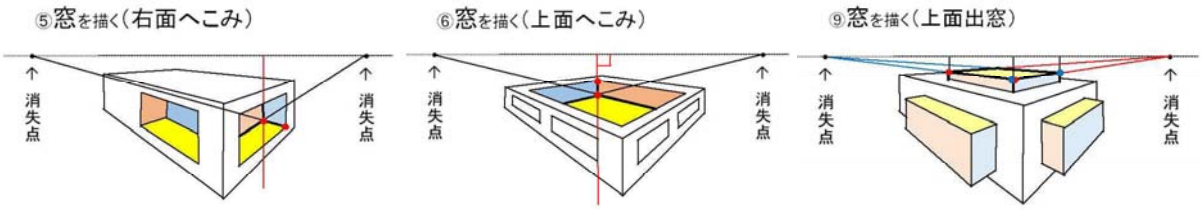


○形やバランスの取り方のポイントや間違いやすい点画について注目させるようにした。

【④「一点透視図法・二点透視図法の描き方」】



（一点透視図法）

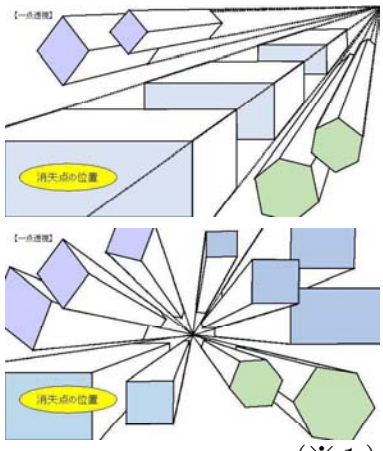


（二点透視図法）

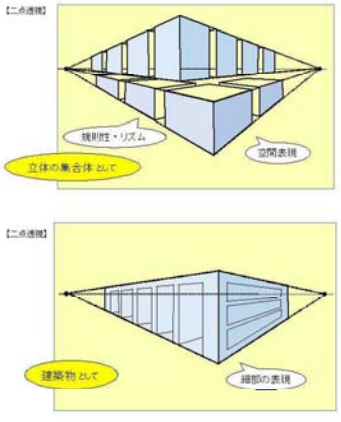
○水平線や垂直線を意識させたり，消失点と結ぶ点を明瞭にしたりし，描く順序を分かりやすくアニメーションを用いて示した。

○１回の説明で理解しきれなかった生徒には，アニメーションを繰り返し再生して説明することで，理解を助ける。

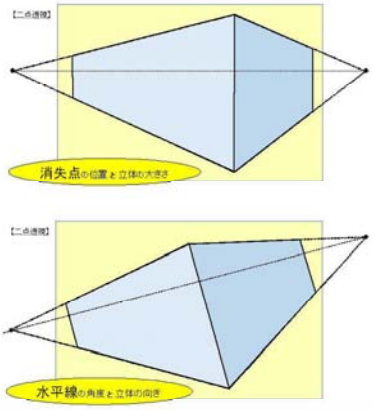
【⑤「平面構成における構図のとり方」（消失点の位置や水平線の向きを考えて）】



（※１）



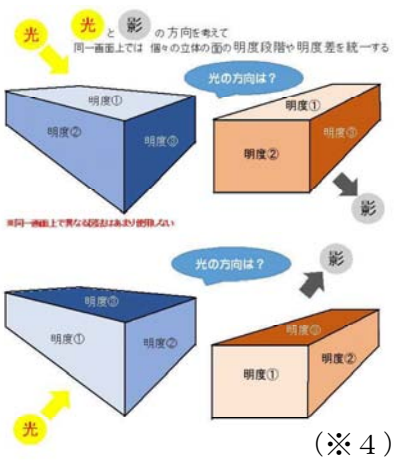
（※２）



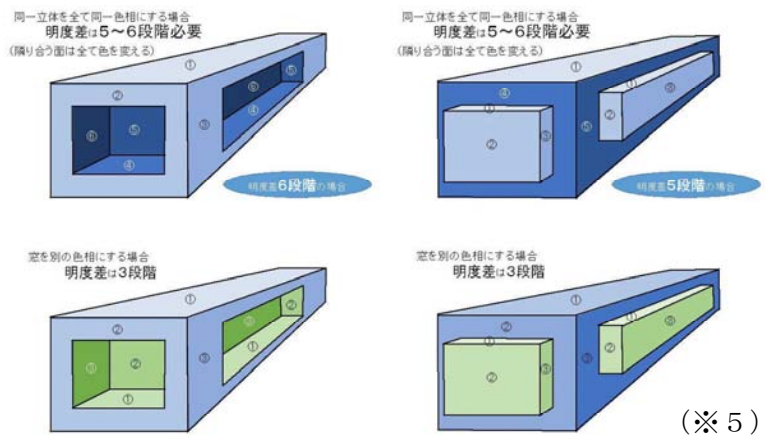
（※３）

○消失点の位置と画面構成（※１），表し方やレイアウトと画面のイメージ（※２），水平線の向きや消失点のとり方と画面の動き（※３）等の関係について，基本的な構図を比較しながら示した。

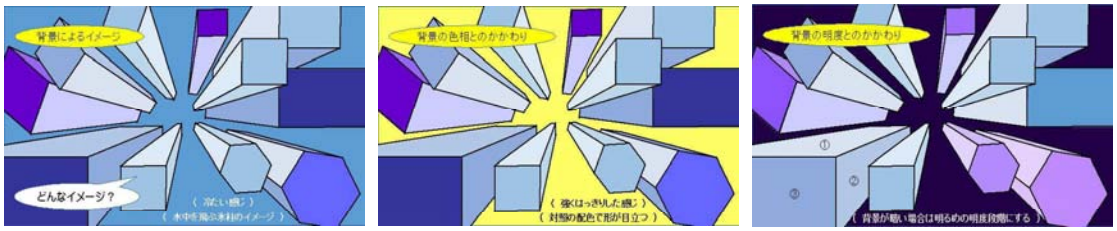
【⑥「平面構成における配色計画の立て方」（光と影の効果・構成やイメージによる）】



（※４）



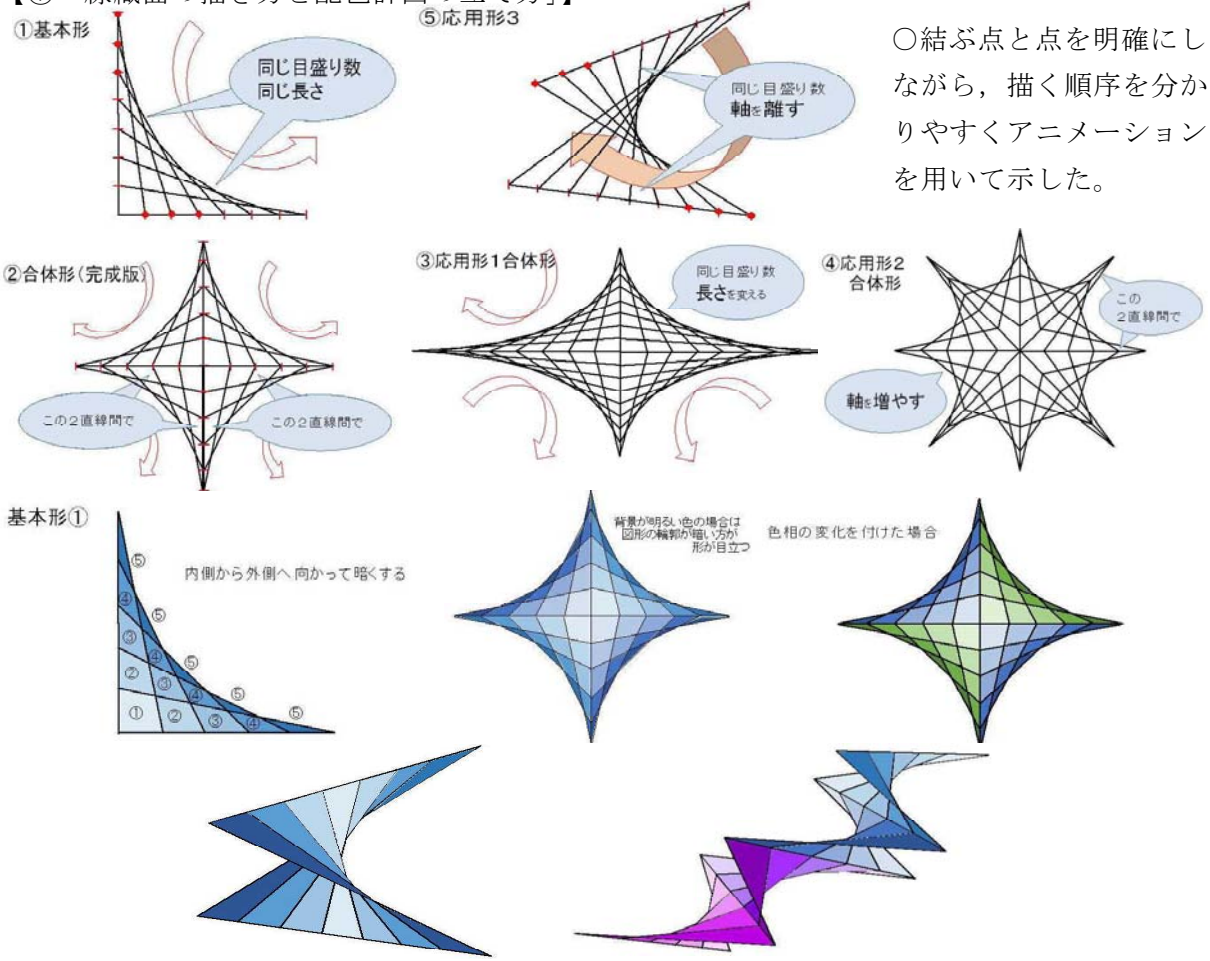
（※５）



（※６）

○光の方向と明度段階（※４），立体感の表現と明度段階（※５），色の感情や明度・彩度・色相などの違いによる背景色とイメージの関係（※６）等について，比較しながら示した。

【⑦「線織面の描き方と配色計画の立て方」】



○結ぶ点と点を明確にしながら，描く順序を分かりやすくアニメーションを用いて示した。

（２）鑑賞の活動における提示型デジタル教材の作成と活用について

鑑賞のデジタル教材は，作品の図版等が豊富に収録されており，作品の解説も充実している。拡大して細部まで見たり，いろいろな角度から見たりできることが最大の利点であり，画面への書き込み等も可能である。しかし，指導者が求めるもの全てが収録されている訳ではない。そこで，題材や指導のねらいに基づいて，生徒の興味関心を高める作品や理解を助けるのに必要な資料を収集し，鑑賞のデジタル教材を作成した。拡大や切り取りの機能，必要に応じて合成や色加工等の編集機能を使って，絵の一部分を拡大して見せることによって，「見ること」に集中させ子どもたち自身の「発見」や「気付き」を促したり，逆に，絵の一部分を隠して何が描かれているかを想像させ「想像力」や「思考力」を働かせたり，生徒たちが主体的に学習できるように工夫した。また，リンク機能も活用し，生徒の「気付き」に合わせて学習活動がスムーズに進むように構成した。

鑑賞の形態は，主に「比較鑑賞」にした。一つの作品を様々な視点からよく見ることは意外と難しいものであるが，目の前に何らかの共通性を持った作品が並べられた場合，自然に作品を見比べ，作品をよく見るようになる。共通点や相違点を見つけることにより，結果として色や形等の造形要素に注目させることができるだけでなく，学習意欲を向上させたり積極的な発表や活発な対話を誘発させたりすることができるからである。さらに，楽しみながら自然に作品に積極的に関わることのできる絵画パズルやアートカードを効果的に用いて，興味関心や学習意欲を喚起させながら鑑賞できるように構成を工夫した。また，言語活動の充実を図るため，学習プリントで自分の考えを整理したり，ホワイトボートを用いて話し合い活動や意見交換を行った。

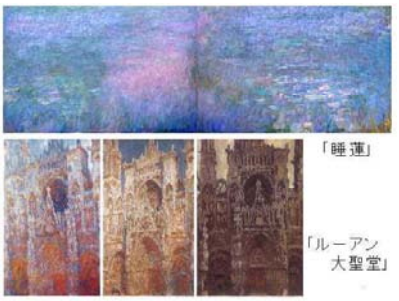
また，専門的な知識や指導経験のない免許外の教員にとっては，デジタル教材があってもそれを有効に活用することが難しいことが想像される。学習目標や活動内容を示すだけでなく，指導者自身が授業展開や指導方法をきちんと把握して学習を進められるように，ノート機能（発表者ツール使用時に有効）を用いて教員の発問や予想される児童生徒の回答，補足説明等を添付し，操作するだけで授業ができるように作成した。

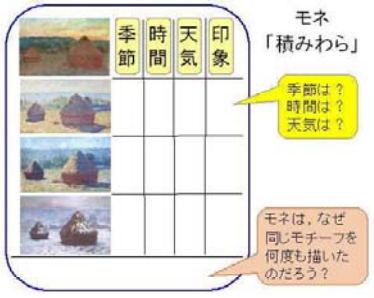
①自画像とゴッホ（多様な表現と造形要素・ゴッホの作風の変化）
②印象派とモネの光の表現（「積みわら」にみる表現の工夫と作者の思い）
③浮世絵とジャポニズム（浮世絵のよさや表現の特徴と西洋への影響）
④冨嶽三十六景（北斎の表現の工夫・作品に込めた思い）
⑤仏像にみる彫刻の美（仏像の役割や技法）
⑥琳派（宗達・光琳・抱一の表現と日本文化の伝統）
⑦ルネサンスの巨匠たち（三大巨匠の作品・表現技法と時代背景）
⑧ピカソの色と形（表現スタイルの変化と配色・作者の表現意図）
⑨ゲルニカ（構図や色に込めた作者の思いと表現意図）
⑩トリックアートの不思議（隠し絵・ひずみ絵・錯視・反転図形・不可能図形）

【①「自画像とゴッホ」（多様な表現と造形要素・ゴッホの作風の変化）】

○学習の導入では，アートカードを用いて，画家たちの様々な自画像の中から同一作者のマッチングを行い，楽しみながら鑑賞の活動に入っていけるようにした。
○自画像の中から「お気に入りの作品」を選び，ホワイトボートを用いてグループで紹介することによって（意見交換による言語活動の充実），多様な見方・感じ方に気付かせるようにした。
○プレゼンテーションソフトの切り取り・拡大機能を使ってポイント部分に注目させ，ゴッホの色や筆触等に着目しながら，表現のよさや美しさ，表現意図と工夫を味わわせるようにした。

【②「印象派とモネの光の表現」（「積みわら」にみる表現の工夫と作者の思い）】





モネ
「積みわら」

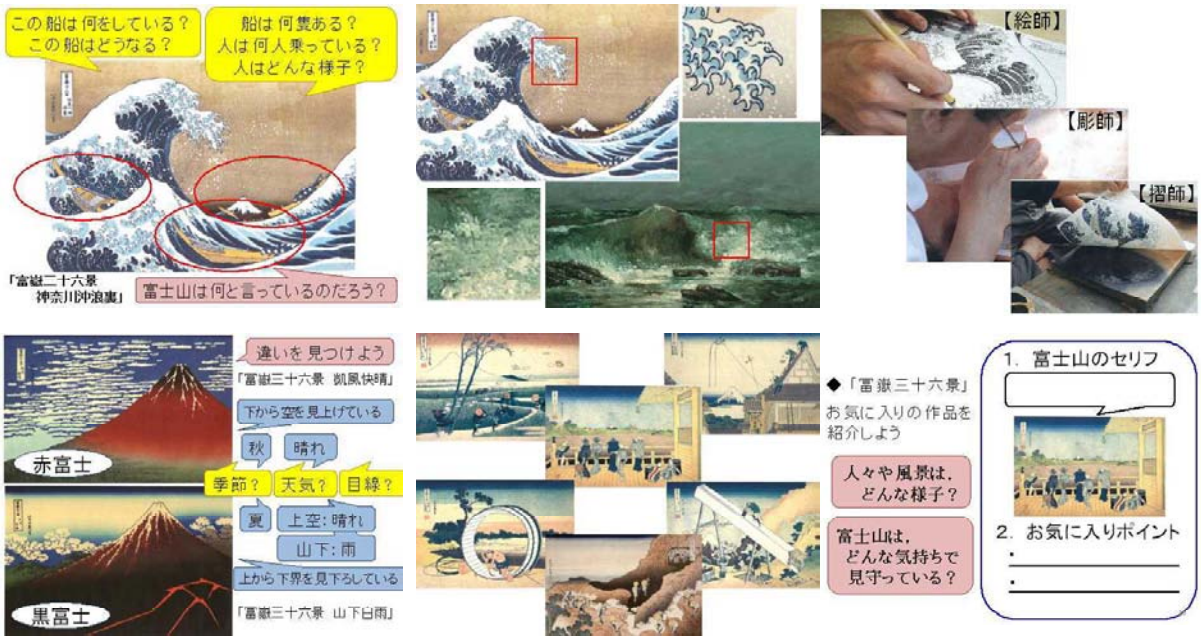
○学習の導入では，印象派の画家たちの絵画パズルを行い，興味関心を高めながら色や筆触等に着目させ，それぞれの特徴をつかませるとともにその表現のよさや美しさを味わわせるようにした。
○モネの連作（積みわら）の作品を比較して，描かれた季節や時間等を考えることにより，観察力や想像力を働かせて作者の表現意図やその工夫を読み取らせるようにした。

○自分の考えを持ち寄りホワイトボートを用いてグループで話し合った後，全体でも意見を交流することによって，感じたことを共有したり多様な見方考え方に気付かせたりするようにした。
○印象派以前の写実的な作品と対比させてモネ独自の表現のよさや美しさを感じ取らせるとともに，様々な対象をモチーフとした連作を紹介し，モネが画家として追求したものを考え，主題に迫らせた。

【③「浮世絵とジャポニズム」（浮世絵のよさや表現の特徴と西洋への影響）】

○学習の導入では，アートカードを用いて，西洋に影響を与えた浮世絵とその影響を受けた洋画のマッチングを行い，意欲関心を高めるとともに色や構図等に着目させるようにした。
○部分を比較することによって線や陰影等に注目させ，それぞれの表現のよさや特徴をとらえるとともに，世界を魅了した浮世絵の魅力を味わわせるようにした。

【④「冨嶽三十六景」（北斎の表現の工夫・作品に込めた思い）】



○書き込みや・切り取り・拡大機能を使って部分に注目させ，北斎の独創的な形の表現や大胆かつ緻密な構図等に着目しながら，表現のよさや美しさと工夫を味わわせるようにした。
○連作の中から「お気に入りの作品」を選び，ホワイトボートを用いてグループで紹介することによって（意見交換による言語活動の充実），自分の感じ方や考えに自信をもてるようにした。
○富士のセリフを考えることにより，描かれている場面や人物の心情について想像を膨らませるとともに，様々な富士の姿や人々の暮らしを見て，富士を描き続けた北斎の思いに迫らせた。

【⑤「仏像にみる彫刻の美」（仏像の役割や技法）】

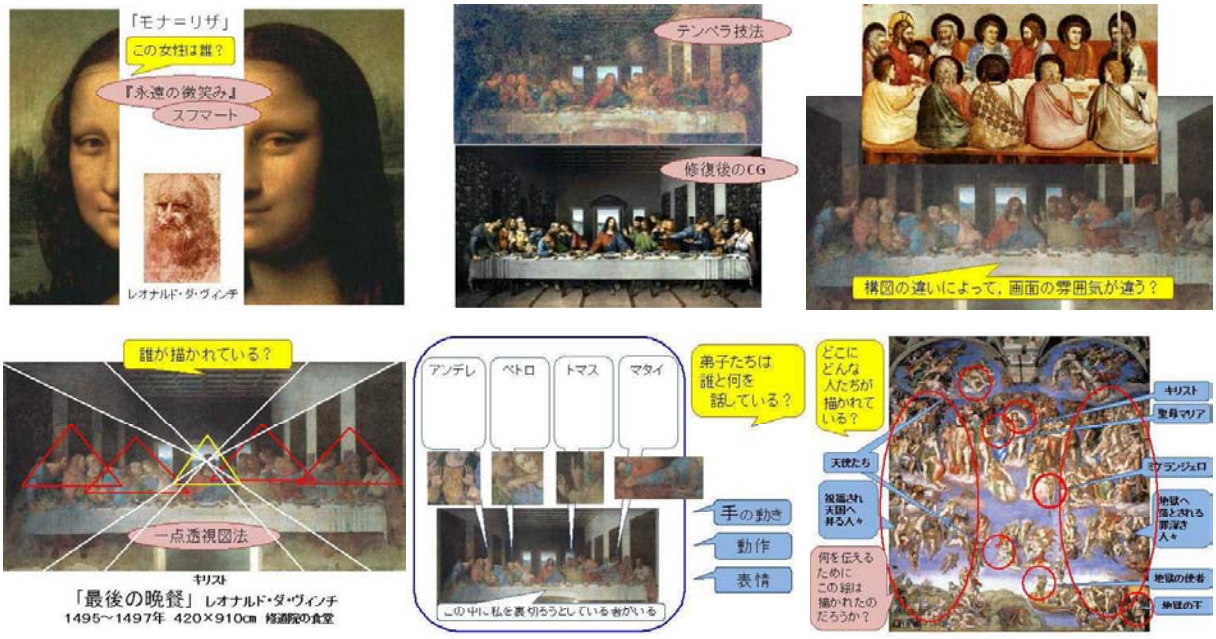
○学習の導入では，カードを用いて仏像の顔（表情）と手のマッチングを行い興味関心を高めるとともに，姿や表情に込められた激しさや優しさ等の仏像の美しさを味わわせるようにした。
○正面から見た姿と下から見上げた姿を対比させたり，制作工程を紹介したりして，仏像の迫力や作者の表現意図と工夫を感じ取らせるようにした。

【⑥「琳派」（宗達・光琳・抱一の表現と日本文化の伝統）】

○書き込み機能を使って部分に注目させ，風神雷神の動きや画面から聞こえる音を感じ取らせたり，切り取り機能を使って構図の工夫に気付かせたりした。
○紅梅や白梅が何を表しているのか，構図にどんなトリックが仕掛けられているのか，グループで話し合ったりカードを使って解明したりしながら，作品に込められた光琳の思いや表現の工夫に迫らせるようにした。

○宗達・光琳・抱一の関連を示し，日本美術への関心や文化を伝承する心を育むようにした。

【⑦「ルネサンスの巨匠たち」（三大巨匠の作品・表現技法と時代背景）】



○拡大機能を使って表情や技法に注目させ，そのよさや美しさを味わわせるようにした。
○書き込み機能を使って構図に着目したり，異なる作者の作品と対比したりして，レオナルドの表現意図やその工夫を感じ取らせるようにした。
○吹き出しを入れて弟子たちのセリフを考える（切り取り・拡大機能を使って手の表情にも注目させる）ことにより，描かれている場面や人物の心情について想像を膨らませるようにした。
○どこにどんな人たちが描かれているか，指示カードを用いながらグループで相談することによって，作品の細部まで「よく見る」ことや積極的な対話を促すようにした。

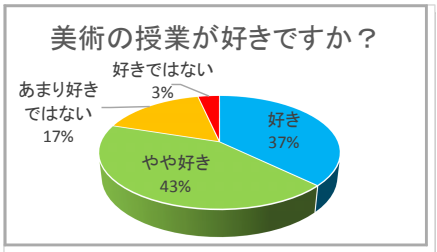
【⑧「ピカソの色と形」（表現スタイルの変化と配色・作者の表現意図）】

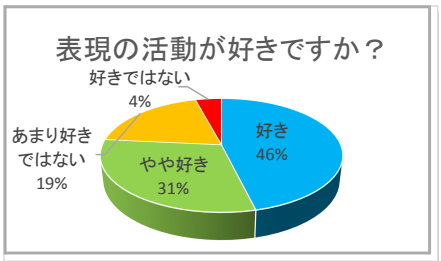
○学習の導入では，キュビスムの絵画パズルを行い，部分の形に注目することで表現技法についての理解を助けたり，ピカソの独創的な作風のよさやおもしろさを感じ取らせたりするようにした。
○アートカードを用いて，自画像を年代順に並べたり時代毎の代表作をグルーピングしたりして，生涯探求し続けた多様な表現方法を味わうとともに，時代毎のピカソの心情等に触れた。
○色彩加工機能を使って作品を白黒にすることにより，形がもたらすイメージをとらえ，それを基に自分で配色・彩色することで，感じたイメージを色で表現した。（色の感情や性質の理解）

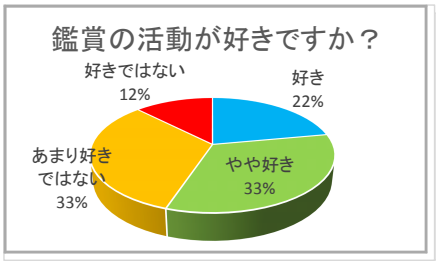
４　成果と課題（主に鑑賞のデジタル教材活用について）

【生徒の感想】

○鑑賞に興味がわいたので美術館の作品も見に行きたい。
○今まで以上に，様々な画家のそれぞれの特徴をもっと知りたいと思った。
○カードやパズルで様々な作品を見ることができ，特にパズルは楽しかった。
○作品を大きいサイズで見たり，近くで見たりして，絵を細かい部分までよく見ることができておもしろかった。
○西洋の絵と日本の絵では表現の仕方が違っていて，その違いを探すことが楽しかった。
○絵をじっくり見てみると，作者が伝えたいことが伝わってくるんだなと思った。今度から美術館に行ったとき，作者がどんな思いで描いたのかなども考えてみたい。
○作品を見て班で話し合うことが楽しかった。
○友達の意見を聞いて分かったことなどもあって，さらにいろいろな作品を見たいと思った。
○友達や先生の意見や感じ方を聞いて，別の見方をすることができておもしろかった。







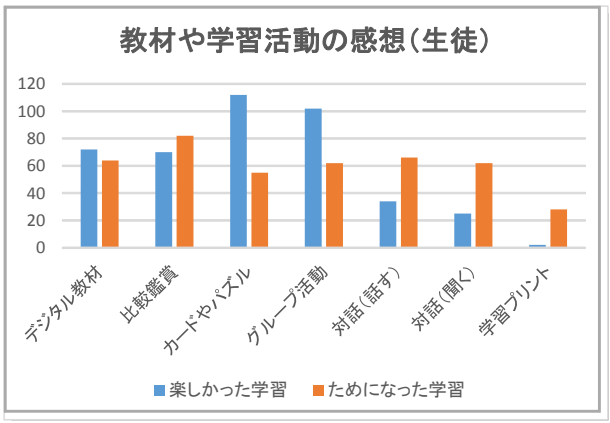
【教員の感想】

○作品の見方が分かり，鑑賞が身近に感じられた。
○ＩＣＴの活用によって，教科書の小さい作品や資料を見るのと違って，大きな画面で色鮮やかに作品を鑑賞することができるのがよいと思った。
○作品の解説や作者の生い立ちを説明するだけでなく，パズルをしたり，セリフを考えたり，２つの作品を見比べて相違点を見つけたり，生徒が考える活動がたくさんあってよかった。
○鑑賞させたい作品が１つのプレゼンテーション教材としてまとめられていること，作品を効果的に見せることができるのがよいと思った。
○１時間にたくさんの作品を見るのはよいことだが，あまり多すぎるのは時間的に無理があるように感じた。生徒の実態を考えるともう少し精選してもよいと思う。
○グループでまとめたホワイトボードを消してしまうのはもったいないので，何か記録に残

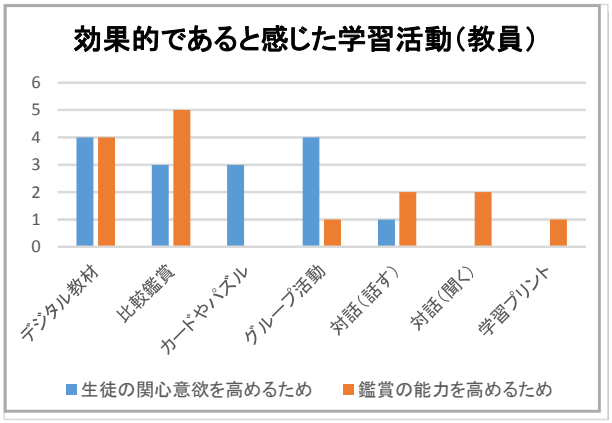
す方法があればよいと思った。（逆にプリントはカード等を直接貼ることなどはできない。）
○パズルの活動は生徒たちが楽しんでやっていた。自分で作るとなるととても面倒なので，授業で使える絵画パズルやアートカードのような教材があると活用できるなあと思った。
○言語的な表現のマニュアルがあれば，生徒が参考にすることができると思った。

【成果】

プレゼンテーションソフトによるデジタル教材を活用することによって，生徒は作品に興味関心をもち，主体的に鑑賞の学習に取り組むことができた。また，比較鑑賞により，造形要素にも着目して鑑賞することができていた。授業後の生徒の感想やアンケート結果（図３参照）からも分かるように，デジタル教材の活用は，生徒の関心意欲の向上に相応の成果があったと言える。しかし，それ以上に，デジタル教材と併用して使用したカードやパズルを用いた学習やグループ活動について，多くの生徒が楽しかったと答えている。このことから，自分の目や手を使って操作したり考えたりする活動的・能動的な学習の方が，ただ作品を見て気付いたことや感想を書いたり解説を聞いたりする受動的な学習より，学習意欲の向上のために有効に働くということが実証された。また，友達の意見を聞いたりグループで話し合ったりすることが，自分のためになったと答えた生徒も多かった。実際に，授業の中でも，自分と同じような友達の意見を聞いて自分の考えに納得したり，様々な見方感じ方があることを知り，友達とは違う自分の考えにも自信をもってそれを主張したりする姿を見取ることができた。デジタル教材や生徒の能動的な活動を促す様々な教材の活用が生徒の関心意欲の向上や対話の活性化を促進したこと，また，それらが「よく見る」「感じ取る」「想像する」「考える」学習（主体的な学び）につながったのではないかと推察することができる。



（図３）



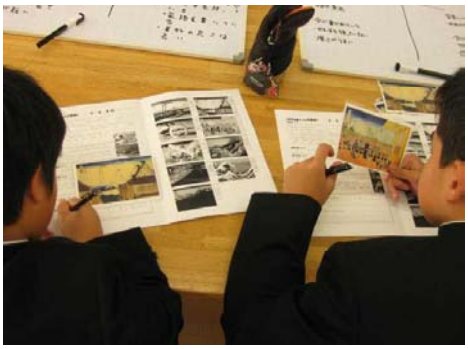
（図４）

【課題】

授業後の教員の感想で課題として挙げられた「１時間の授業で鑑賞する作品数や内容量」「ワークシートの活用の仕方」「言語活動の充実のための支援」等については，より効果的に教材を扱うために更なる検討が必要である。

○学習量については，情報過多になり生徒が混乱しないように，生徒の実態（鑑賞経験や鑑賞の能力）や授業中の反応を見ながら精選していくとよい。
○ワークシートについては，「個で考えるのか」「グループで話し合うのか」「全体で交流するのか」効果的な学習形態を考えたうえで，それに合った適切なスタイルで作成しなければならない。ホワイトボートでの学習はデジタルカメラで撮影するなどして記録に残すこともできるが，対話を通した個々の学び（個→集団→個）を生徒自身が振り返ることができ，なおかつ，大切な評価資料となるワークシートを作成する必要がある。
○言語活動の充実については，語彙カード（図５参照）を参考にさせることで，感じたことや考えたことについて自信をもって表現したり発表したりすることができると考える。
○積極的にグループ活動を取り入れる場合，積極的な生徒だけの活動とならないように，少人数で編成する，役割分担をする等の工夫が必要である。
○プレゼンテーションソフトのメモ機能や発表者ツールにより，適切な発問や解説を行いながら授業が進められるようになっているが，初めて使用する場合は事前の予習がかなり必要である。

（図５）



６　まとめ

美術科における提示型デジタル教材の活用は，「鑑賞作品の効果的な提示」「学習内容の焦点化」「造形要素や技法等の理解の補助」「イメージの視覚化」「対話の活性化」「目標の明確化や指示の的確な提示」「板書時間の削減」「教員の指導法の改善や教材準備の効率化」「資料のコンパクト化」等々，様々な展望をもっている。表現領域のデジタル教材については，タブレット端末にインストールしておけば個の能力やペースで繰り返し視聴できるため，一斉指導で理解が不十分であった生徒や理解に時間を要する特別な支援の必要な生徒にも対応でき，個に応じた指導に効果を発揮すると思われる。

今後も，生徒の興味関心や実態に合わせて，デジタルとアナログの融合や表現と鑑賞の関連を図り，美術の基礎的な能力や豊かな感性の育成を目指した主体的な学びについての研究を進めていきたいと思う。

７　参考文献

「デジタル教科書」の現状と課題　　文部科学省
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1359569_3.pdf

「学びの過程の中で協働的な活動を効果的に取り入れる指導の工夫」
東京都教育委員会　東京都教職員研修センター研修部　教育研究員研究報告書
www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/.../h27chu-bi.pdf

「美術の基礎的な能力を伸ばす指導の工夫」
―デジタル教材の活用による関心・意欲の向上と主体的な学習態度の育成―
糸満市立潮平中学校　伊敷　学
www.edu-c.open.ed.jp/post.html -

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年　度 （平成）	内　　容
30	元	園外の地域環境を生かし，幼児の主体性を育てるための活動は，どのようにすればよいか 幼稚園第２ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし，児童一人一人に応じた指導をめざして －学校・家庭・地域が一体となって－　池田町　下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む，豊かな教育活動」 －ふるさと意識を高めるために－　山城町　山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 －ボランティア活動を通して－　井川町　井川中学校 へき地の特性を生かし，一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 －同単元類似内容の指導の試み－　池田町　出合小学校 郡内家出少女についての考察　三好郡青少年育成センター　久原　啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ －児童・生徒の理解と援助のために－　三好郡教育研究所員　入江　宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村　善徳小学校　教諭　徳善　之浩 体験を通して豊かな心を育て，実践まで高める道徳教育 三加茂町　三庄小学校　教諭　吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む，活力ある生徒の育成をめざして 池田町　池田第一中学校　教諭　小島　治子 西字小学校における生活科年間計画 －平成４年度教育課程完全実施へ向けての新しい試み－ 山城町　西字小学校　教諭　内田三千代 英語指導助手（ＡＥＴ）とのティーム・ティーチングを通して －コミュニケーション能力の育成のために－ 池田町　池田中学校　教諭　木藤　康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育　－人とのかかわりをとおして－　第３ブロック幼稚園 池田町　川崎幼稚園　教諭　林　　節子 馬場幼稚園　教諭　丸岡　明美 西山幼稚園　教諭　東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 －たて割り班の活動を通して－　井川町　井内小学校　教諭　立川　義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 －進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指して－ 池田町　白地小学校　養護教諭　平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようであればよいか －学校行事などの活動を通して－　山城町　山城中学校　教諭　佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 －学習意欲を高める理科の指導－　三好郡教育研究所員　藤本　智恵
33	4	主体性を伸ばし，実践力を育てる特別活動 －個性を重視した，たて割りグループによる児童集会活動を通して－ 山城町　大野小学校　教諭　上田　　優 へき地小学校における性教育についての研究 －性教育の実践を通して－　東祖谷山村性教育研究会　和田小学校　教諭　松村　直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して －体験的活動を通して－　西祖谷山村　西祖谷中学校　教諭　篠原　一仁 中学校国語科書写における行書指導 －行書を活用した筆写活動の日常化をめぎして－　三好郡教育研究所　研究員　岸　敬子

集	年　度 （平成）	内　　容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめぎして －主体的に取り組む活動－　　第３ブロック幼稚園　教諭　上林加津子　永田　協子 自然に感動し，主体的に学び続ける児童の育成 －一人一人の表現活動を高め，科学的な見方や考え方を育てる理科学習－ 三野町　王地小学校　教諭　安西　政和 自ら学び，自らきたえる心豊かな子どもの育成 －ボランティア活動をとおして－　　三好町　昼間小学校　教諭　武岡　澄代 奉仕等体験学習を通して，思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町　池田中学校　教諭　古林　久代 英語指導を通して平和教育をすすめる一私案 －ピース・メッセージの実践を通して－　　三好郡教育研究所　研究員　長谷　郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり －すこやかな児童の育成をめざした，地域ぐるみで取り組む学校行事－ 山城町　大和小学校　教諭　久保　満男 小規模校における環境教育の取り組み －教科，特別活動の実践を通して－　　池田町　馬路小学校　教諭　細川　敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして　　三好町　三好中学校　教諭　玉木　利典 選択履修の幅の拡大　－家庭科－　　三好郡教育研究所　研究員　佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼推園教育 －幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考える－　　第４ブロック幼稚園 山城幼稚園　蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして －「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組み－　三加茂町　加茂小学校　教諭　小笠　健二 「郷土を愛し，心豊かな児童の育成を目指して」 －体験学習・ボランティア活動を通して－　　西祖谷山村　吾橋小学校　教諭　濱口　久弥 生徒会活動の活性化をめざして －自ら考え，行動する生徒会活動への教師の支援－ 三加茂町　三加茂中学校　教諭　山西　敏広 生活に生きる書写力の育成を目指して－中学１年生への意識調査と実践例－ 三好郡教育研究所　研究員　栗田　典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 －施設訪問を通して－　　井川町　辻小学校　細川　文男 『ふるさとを愛し，人間として主体的に生きる生徒の育成』　　山城町　大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 －「何について」「どのように」「どこまで」指導するか－ 三好郡教育研究所　研究員　吉田美千代

集	年　度 （平成）	内　　容
38	9	幼稚園において，幼児の興味や欲求に応じ，幼児とともに充実した 生活をつくりだすためには，環境をどのように構成すればよいか 第１ブロック幼稚園　教諭　宮成　典子 物やお金を大切にし，思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町　三縄小学校　教諭　森本　明子 環境教育　Think Globally, Act Locally　を目指して －積極的に環境と関わり，責任ある行動がとれる生徒の育成－ 三野町　三野中学校　教諭　丸岡　美枝 学校不適応問題の諸相と教師の援助について　三好郡教育研究所　研究員　山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 －ある不登校児とのかかわりを通して－　三好郡教育研究所　研究員　吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり，よりよい環境づくりや 環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町　政友小学校　教諭　大西公美子 一人一人の個性を尊重し，豊かな心と，『生きる力』を育むために －地域に育てられ，地域と共に伸びる生徒の育成－ 東祖谷山村　東祖谷中学校　教諭　椙原真里子 今，子どもたちの心は？ －三好郡内小中学生意識調査から－ 三好郡教育研究所　研究員　吉岡　弘恵 三好郡教育研究所　研究員　山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） －生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成－　三好町内幼稚園 ふるさとに立ち，たくましく生きる力をもつ，心豊かな子どもの育成 －名頃を見つめ，名頃を愛する学習を通して－ 東祖谷山村　名頃小学校　教諭　橋本　隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きるカ」を育む教育の創造 －「選択の時間」を生かした取り組みの中で－ 井川町　井川中学校　教諭　内田　典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員　西井川小学校　吉岡　弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員　三好中学校　新居　信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して，生きる力を育む王地学習 王地小学校　教諭　北川ひとみ 自ら学び，自ら考え，主体的に行動する生徒の育成 －地域の特性を生かした取り組みの中で－　池田第一中学校　教諭　立花　久 三好郡における情報教育の現状とその考察 －郡内小中学生・教職員の意識調査から－ 三好郡教育研究所　研究員　池田中学校　木藤　和恵 三好郡教育研究所　研究員　三好中学校　新居　信子

集	年　度 (平成)	内　　容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 －幼児が自ら生活していくための教師の役割－　白地幼稚園　教諭　木徳　友子 「ふるさとを愛し，共に学びあう心豊かな児童の育成」 －へき地の特性を生かした様々な体験活動をとおして－　東山小学校　教諭　高篠　佳子 生きる力を養う生徒の育成　山城中学校　教諭　白井　正道 ＴＴ授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成１２年度・１３年度)から中学校数学におけるＴＴ授業について考察する 三好郡教育研究所　研究員　池田中学校　上田　美恵 自ら学び，豊な心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所　研究員　池田中学校　木藤　和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 －金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおして－ 三好郡教育研究所　研究員　西井川小学校　小角　昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所　研究員　池田中学校　上田　美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 －学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワーク－ 三好郡ネットワークセンターＩＣＴコーディネータ　中川　斉史 生藤　元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 －身近なものに興味を持ち，活動を豊かにするためには，教師はどのようにかかわればよいか－ 吾橋幼稚園　教諭　山口　里子 「生きる力」を育む総合的な学習 －ふるさとを愛し，人や自然と積極的にかかわろうとする児童の育成をめざして－ 出合小学校　教諭　岡　佳子 「ふるさとを愛し，豊かな感性を持ち，自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校　教諭　富永　浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ，個性を生かす指導について －人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるために－ 三好郡教育研究所　研究員　田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求　－「本との出会い」をとおして－ 三好郡教育研究所　研究員　小角　昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然，文化にふれる活動を通して，自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校　教諭　高岡　和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』　池田中学校 「みる力」を育てる美術教育　－美術の基礎・基本をみつめて－ 三好郡教育研究所　研究員　田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか　三好郡教育研究所　研究員　生藤　元

集	年　度 （平成）	内　　容
46	17	幼稚園において，幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ， 　幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第１ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし，一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校　教諭　鶴田　美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して，自ら考える生徒の育成 三好中学校　教諭　野田　圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所　研究員　生藤　　元 文字式の指導に関する研究 　－１年文字式における生徒の理解の仕方について－　三好郡教育研究所　研究員　上田　美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 　－主体的により良く伝え合う力の育成をめざして－　西井川小学校　教諭　丸本　豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 　－共に生きる町づくりについて考えよう－　三加茂中学校　教諭　玉木　利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状　三好教育研究所　研究員　生藤　　元
48	19	「 健全な心身の成長をめざして」－高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながら－ 第２ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 　自らの食生活に関心を持ち，すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 　－学校・家庭・地域の連携した取り組み－ 池田小学校　栄養教諭　大西　欣美 「確かな学力」を身につけさせるために 　－プレゼンテーション能力の育成とＩＣＴ機器の利用－　三野中学校　教諭　中川　悌二 「グラフを書くのは何のため？」－何でもかんでも「％」からの脱却で，知的な分析を－ 三好教育研究所　研究員　中川　斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 　－子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えよう－ 三好教育研究所　研究員　西井　昌彦 「中学校理科におけるＩＣＴ機器の活用」 　－評価活動におけるマークシートの利用－　三好教育研究所　研究員　山田　泰弘
49	20	ふるさとを愛し，ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 楪生小学校　教諭　谷川　智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 　－『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心として－ 東祖谷中学校　教諭　髙﨑　英和 授業カイゼンとＩＣＴ活用　三好教育研究所　研究員　中川　斉史 体育科における効果的なＩＣＴ機器の活用について　三好教育研究所　研究員　西井　昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について　三好教育研究所　研究員　中川　斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 　－構成的グループエンカウンターの考え方を生かして－ 三好教育研究所　研究員　石丸　秀樹

集	年　度 （平成）	内　　容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして －人やものとのかかわりを深め，豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園　教諭　山中あけみ 池田幼稚園　教諭　大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－　足代小学校　教諭　熊井　美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる　井川中学校　教諭　村上　郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－　三好教育研究所　研究員　藤本　恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題　三好教育研究所　研究員　福田　ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 －人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－　芝生小学校　教諭　小原　敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる　山城中学校　教諭　内田　清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－　加茂小学校　教諭　福田　ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態　三好教育研究所　研究員　山西　敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－　三好教育研究所　研究員　山口　恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－　大野幼稚園　教諭　谷本　紀子 地域から学び，ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし，自らを表現できる佐野っ子をめざして－　佐野小学校　教諭　山田　知弘 人や地域とつながり，協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校　教諭　西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ　三好教育研究所　研究員　山西　敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所　研究員　山口　恭史
53	24	家庭や地域，中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－　東祖谷小学校　教諭　森永　直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－　池田中学校　教諭　丸岡　美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－　昼間小学校　教諭　山口　恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所　研究員　山下　達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所　研究員　岡本　博一

集	年　度 （平成）	内　　容
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ー様々な体験活動を通じて，地域の人々や同年齢，異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究ー 昼間幼稚園　教諭　佐藤　重美 地域とともにある学校をめざして ー地域の教育力を生かして育てる三庄っ子ー　三庄小学校　教諭　三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され，つながりを大切にする活動を通して 三好中学校　教諭　近藤　剛 複式学級における指導の充実を目指して　三好教育研究所　研究員　赤堀　誠司 ＩＣＴ活用の推進と情報モラル教育　三好教育研究所　研究員　岡本　博一
55	26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～ 井内小学校　教頭　住田　克弘 豊かな心と，自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館を中心として～　三加茂中学校　教諭　山下ちづる 小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み　三好教育研究所　研究員　岡本　博一 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業　三好教育研究所　研究員　赤堀　誠司 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ～討論活動を取り入れた授業づくり　三好教育研究所　研究員　井川　秀樹
56	27	自分で気づき，考え，実行し，仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～　箸蔵小学校　教諭　藤原　隆司 出会いをつなぎ，自己を見つめ，自他の人権を尊重する生き方を求めて ～識字学級との交流を通して～　三野中学校　教諭　尾形　君代 「読む　知る 感じる」　読書環境をめざして ～学校図書館教育の実践と課題～　三好教育研究所　研究員　加藤　公夫 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～　三好教育研究所　研究員　井川　秀樹
57	28	地域から学び，郷土を愛し，主体的にたくましく生きる児童の育成 ～様々な人とのかかわりや体験活動を通して～　山城小学校　（発表者　教諭　井上　清隆） 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題　三好教育研究所　研究員　加藤　公夫 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ～見て，考えて，表して，意見を交わす～　三好教育研究所　研究員　宮成万寿美
58	29	変化する社会の中で，心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成 ～身近な自然や人とのかかわりをとおして しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫～　西井川幼稚園　教諭　元木真砂代 豊かな心をもち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成 ～一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを通して～　王地小学校　教諭　濱口　ミヱ 生徒の意欲関心を高め，豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて ～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～ 三好教育研究所　研究員　宮成万寿美 社会科デジタル教材の開発と活用 ～ＩＣＴの有効な活用をめざして～　三好教育研究所　研究員　常村　淳